

---

# 理の樹(コトワリノキ)

真水

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

理の樹

### 【Zコード】

Z3086M

### 【作者名】

真水

### 【あらすじ】

世界は光の国と闇の国に分かれ、古き時代から争いを続けていた。その戦いは神々の代理戦争とも言えるものであつた。光の国に生まれたリジューは、妬みや憎しみなどの負の感情の存在しない母国に違和感を感じながらも、全ての人々を守りたいと思つていたが、戦場は確固たる信念すら押し流してしまう。人として生き、人として死んでいく。ささやかな望み。それすら叶わないのだとしても、独りでないのなら永劫の時も恐れはしない。「貴方がいてくれるから、オレはオレでいられる」最後の選択の時、リジューの傍には誰がいる

のだろうか

。

## プロローグ（前書き）

ボーイズラブ要素といつても、非常に軽いものになると思います。  
しかも、かなり長い間、友情としか思えないかもしれません。でも  
最終的には誰かを選びます！

## プロローグ

.....リン

.....リン・ゴーン

.....リン

鐘の...、  
どこからか、鐘の音がする...。

祝  
せ

誕生日を祝

## 世界よ、 の生誕

を祝せ

どこからか、声が聴こえる……、  
幾重にも重なり合つて反響する声……。

(苦笑……)

胸の中、否定する想いが湧き起る。  
めでたい事などあるものか、喜ばしい事などあるものか。

(哀しい……)

犠牲の上の生誕を、笑つて祝う事などできないものを……。

ふいに、暖かな何かが頬に触れた感触を覚えた。その何かは優しく丁じりをぬぐつて、濡れた感触を残した。

(……?)

離れていく温もりが惜しくて、追いかけるように瞼を開こうとしたが、震えるばかりでなかなか瞼は持ち上がるうとしない。

なんとか薄く眼を開けてみると、すぐ近くに濡れた指先が見えた。

(……涙?)

そう、哀しかったのを思い出した。ではこの指が流れた涙をぬぐつてくれたのか。

「泣くな

視線を上にあげて、この指の持ち主を眺めてみる。

「泣くな、お前に罪など無いのだから」

優しい言葉を紡ぐ人に感じる、この安堵感は何であろうか。初めて会う人であるにも関わらず、この人は自分の味方だという、絶対的な信頼があった。

「独りで、苦しむな……」

そう言つての人こそ苦しそうで、思わず手を差し伸べた。

「泣かないで、ぐださい……」

差し伸べた左の手の平で、彼の暖かな頬を包み込むと、苦痛に耐えるかのように眉を歪ませた。

他人の痛みを自分のものであるかのように、共に苦んでくれる、優しい人だ。

短く清潔に整えられた黒髪、言葉よりも何よりも感情を現す、濡れて光る青灰色の瞳。そして大地の祝福を示す浅黒い肌。

明るい色彩は何一つ持っていないといつて、光だ、と思った。

僕を導く、清冽な光

だ  
：

## プロローグ（後書き）

物語の触りですので、どうこう話が全然分からいかと思いますが、可能な限り更新していくので、最後までお付き合いくださいませ。

## 決意の音色（前書き）

普通に女の声で出でてきます。しばらくはかなり頻繁に出てきます。女の子は必要です。いくらなんでも、男だけの物語つて有り得ないと思つので。

## 決意の音色

リンゴーン。

学校長自らの手で打ち鳴らす、この神学校の授業終了の鐘の音は清らかに澄んでいて、この周辺一帯の名物となっていた。

隣接する教会に負けず劣らず美しい音色で、道を歩む者達が思わず足を止めてしまうほどだが、生徒にしてみれば自由を知らせるだけの嬉しい音でしかない。

いずれ神に仕える身とはいえ、彼らのほとんどは、まだ幼い未熟な子供達だった。

「リジュ君！」

神学校の制服は男女共通でシンプルなデザインだ。正神官服とは、色と長さが異なる。神官服は真っ白で黒い縁取りに長さは膝裏まであり、生徒服は真っ黒な生地に白い縁取りで、長さは腰が隠れる程度だ。

だが今“リジュ”と呼ばれて振り向いた金の髪の少年だけ、周囲とは異なった制服を着ていた。

「今回も首席だったわね。おめでとうーー」

わざかに頬を上気させた赤毛の少女が、瞳をキラキラさせて祝いの言葉を紡いだ。

「ありがとう。でも、オレが通う条件として、トップを取り続けるつて校長との約束だしさ。『当たり前』って思つとかないとダメなんだ」

「でもでも！ トップって『学年首席』つてことなんでしょう？ リジュー君は『学校首席』から落ちたことないじゃない！ 並み居る先輩を押しのけてつ、ね？」

リジューの着る制服の色は白く、縁取りは黒。腰には腿の半ばまであり、学生服と神官服の中間となる。

この服は神学校のトップに立つ者にのみ許された、神官の座に最も近い者の証なのである。

「週に二回しか出席しないのにねえ。あたしらの半分じゃない。一休どう勉強してんのや？」

癖のない茶髪の少女がおどけた口調で会話に入ってきた。

「どうして…。図書室が閉まるまでは、大抵そこで勉強してるけど」

普通に予習・復習しているだけだよ、と続ける。

「普通に～？」

「あ。でしたら、『めんね？ 私が今日お誘いしたのは迷惑、だつたかしり…』

赤毛の少女は緩やかな癖毛を指で絡め取りながら、もじもじと呟いた。

「別に気にすんなって。それより、そろそろ行かないか？」

リジューは少女のそんな態度を気にもせず、カラリと笑った。

「あ、私たち、着替えてから…」「着替え？」

リジュはきょとんと反復した。なぜ着替える必要があるのか。

「カリアーナ、今日は君の婚約者の誕生日プレゼントを選びに行くんだる」

「う、うん」

「男の人的好みが分からぬから一緒に店に行つてくれつて、それはいいんだけどさ。私服姿で一緒に居る所なんかもしも見られたら、何か誤解されるんじゃないか」

「……」

「あ～っ、モー！！」

なぜか沈んだ顔をする赤毛の少女・カリアーナの横で、茶毛の少女が突然激しく叫びだした。

「乙女心の分つかんないヤツは黙つて待つてな！ あたしらは、とにかく・か・く・着替えてくるから、半時ほどどつかで時間潰してるよーに！ ほら、カリナ、行くよつ」

「エ、エアル、待つてよ…」

ばたばたと足音を立てて、二人が教室を出て行く。

女子特有のかしましさが消え、辺りはしんとなつた。ほかの生徒たちはとうに帰宅していたらしく、街のざわめきが微かに聞こえるほどに静かだ。

「乙女心？」

取り残されてしまったリジュは一人呟く。

「分かれつて、ムリだろ。オレ、女じゃないし」

彼女達の言う所の“乙女心”を理解するには、リジュの心はまだ幼すぎるようだった。

半時後、三人は問題なく合流した。

「カリーアーナの婚約者ってどんな人？」

合流して早速切り出した。

「年齢とか、性格とか。いくつか良さそうな店は知ってるから、で  
きるだけ好みに合う物を贈りたいだろ」

「えっと、性格は、そうね…冷静な人、かしら。軍務省勤めなのだ  
けど、声を荒げたりはしなそうだわ」

「軍務省！？」

思いもよらぬ言葉だった。カリーアーナがつい先日十五歳の誕生日  
を迎えたばかりだから、相手もいついていても、成人するかしない  
か位かと思っていたのだ。

しかし、軍務省・軍人だとは。

確かあそこは、騎士としてのキャリアを相当積んでからでしか入  
れぬはずだ。

「ふふふ～んっ。あたしは知っているっ。カリナのお相手はー、誕  
生日でなーんと二十八歳！」

「二十八！？」

つい声を荒げて、カリーアーナの顔をまじまじと見てしまう。軍人というエリートにしては随分と若輩だが、彼女の相手としては年上過ぎではないだろうか。

カリーアーナ本人は複雑そうに視線を彷徨わせている。

「十三も年の差ありだなんて、ひどいよねえ？　でもお貴族様方つてのは、こんなの普通なんだってわ」

「は……」

驚きはしたが、納得した点もあった。そもそも誘いを受けた時から、そんなに乗り気は感じなかつたのだ。

貴族である彼女にとって、結婚は恋愛して行き着く楽しいものではなく、やらなくてはならない義務なのだろう。

「あー…まあ、んじゃ、そしたら『ファイナルジャの店』がいいかな。落ち着いた色合いとデザインが売りの店で、幅広い年齢層に人気があるつてウワサだし」

プレゼントも義務として贈るのなら、好みなどあまり深く考えずに、無難な物を選ぶべきだろう。

「『ファイナルジャの店』つて、確か下区寄りになかつた？　あたしんちみたいな『裕福でもただの商人』相手くらいならいいと思うけど、貴族間のプレゼントで、あそこはまずくない？」

あたしも入つたことないから中までは知らないけど、ヒアル。

「うん、オレも直には知らないけど、けど何人の貴族があの店

褒めてたから、問題はないと思つ

一人で申し合わせたかのよう」に、カリアーナに視線を送る。

「まあ、でも。カリアーナが下区に近づくのはまずいなら、ほかの店にするけど。どーするか」

長く整ったまつげがパチパチと音がしそうなほど瞬きを繰り返して、カリアーナはリジュとエアルを交互に見た。

「大丈夫よ」

につこり笑つて頷いてみせる。

「下区に行くことだつて禁止されているわけでもないのだし」

それには、と小首を傾げて再度笑い、

「行つた者勝ち、でしょ？」

いたずらを思いついたような顔をした。

店内には予想以上に客が多く入つていた。

通路を広めに造られていたため、さほど混雑には感じられないが、三人はやや圧倒されていた。

「すごい…」

「う、うん

何がすごいかと言えば、店員達だ。これだけの客入りならばさざかし忙しいだらうに、せわしなさを一切感じさせない接客態度は文句なしだ。

絶やさぬ笑顔。柔らかくて丁寧な物腰。なるほど、貴族に入氣となる訳だと思つ。

「それにしても、リジュ、あんた良べっこのかわサなんて知つてたね？」

「ああ、オレつて貧乏なんだって言つたら、前に

「えつと…」

(まー、誰も信じなかつたけどな)

「アレは本当なワケ。で、学校に来てない田は、オレ働いてんだよ。オレは両親いないし、じーちゃんも年だから、オレも働かないと生きてけないからさ」

「……」

おや、黙り込まれてしまつた。

暗ぐしたくてこの話をしているのではないのだ。

「オレつて運良くてさー。結構良い所で仕事してるんだ。そこで貴族のおじ様方が色々教えてくださつたってわけだ

話しながらも、ショーケースの中や棚の上を物色し続ける。

ハンカチ、サイフ、ベルトなどの小物から、コートや果ては馬具までも置いてある。馬具はさすがに高価すぎるし、何より女性から

男性への贈り物には不似合いだ。マダムから少年へはまだしも、少女から紳士へのプレゼントなのだからして。

(ん…これは?)

色とりどりの石のはまつた、ブローチのよつなものがあった。

(へえ…)

「な、こんなのだーだ」

いつの間にか数歩離れてしまっていた一人を手招きする。

「記章の留め具だつてさ」

「留め具…」

「何ソレ?」

「カリーアーナは知ってるんだろうけど、上流階級の人はさ、身分を示す記章を肩に付けるんだよな。それの留め具だよ。…特に『コレなんか良いんじゃない? 水晶のヤツ』

十数種類の内、右上に置かれている物を指し示す。

「これ、石の底つつーか、台座に十字架が彫つてあるんだよな。石も水晶で清らかな感じがするし、神学校生徒が選ぶ物らしくていいと思つ」

「うん、…きれいね

微笑んではいるが、どことなく泣きそつた声だった。

「？ 何、どうし…つ！？」

突然、ぐらりと眩暈がした。

「…つ、じ、れは…つ」

心をくじき、折りうとする重いフレッシュヤー。

「く…あつ、悪しき、氣配…！」

敵国の扱う、人心を悪意に墮とす闇の魔法。

「う、そ…。だって、警報、鳴ら…なかつ…つ」

時はウツロ  
影は闇に墮つ

穢れの海にたゆたいし 我ら魔の

尖兵

「くそ…つ」

歌だ。

詠が聴こえる。

光から闇へと墮とす、魔成の呪文。

「二人とも、結界を張るぞ！」

「そ、んな…ムリ…つ」

「やんないと皆、闇に墮ちるぞ…」

「ちよつ……無理だつて……つ。あたし、ら……あんたと出来……違……つ」

そんな事は百も承知の上。

それでもやらなくては。一刻も早く。詠唱は途切れなく続いているのだから。

うたえ

おどれ

さけべ

「二人は十字架を思い浮かべろ！ それだけでいい！」

「十字架……授業、で……」

「そうだ！ 自分にとつて一番大切な十字架を思い浮かべて、集中しろ！」

授業で行われた、最も簡単な力の集束方法だ。

学校のでも教会のでも家のでも、いびつな手作りの物でもいい。一番大事な十字架を心に想つことで、力は溢れてくるのだと言つていた。

「それだけでいい！ あとはオレが導く！…」

そして 眠れ

時間がない。早くまとめなくては。

二人の力は大きなものではない。足りない分は自分が出さなくて

はならない。

( まだだ )

身体中が満ち足りていく。

( けど、まだだ。…限界まで )

「Jの店だけでなく、Jの辺り一帯を守るために。人間として出せる限界ギリギリまで高めていく。

満ちて、満ちて、満ちて、 弾ける、その直前まで。

(今、だ…！)

全て その身の 欲のまま

敵の呪文に被せらるよつて、詠唱を開始する。

「其は我らを守る光の籠。闇の波動をしなやかに弾き、汚れし意識を彼方へ散らす。 退け、暗き者よ」

リジュにとつて呪文は、力を扱う際の補助でしかない。唄いきる前に結界が形成されていくのを感じていた。

(……本当は)

隣で二人が安堵のあまり、身体の力を抜いて大きく息を吐いていた。だらけきつていいる。本当は結界維持のために、力は保つていないといけないのだが。

まだ学生なのだから仕方がない。どうにか集中までこじりつけることが出来ただけでも良しとしなければならないだろう。

闇の圧迫から解放された人々が、ようやく氣を持ち直してざわめき始めた。

（本当は、もっと簡単な方法を、オレは知っているのだけど…）

「おまえは、なぜ？」

ざわめきの中、奇妙にはつきりと、その声は届いた。どうしてか、それは自分に向けられたものだと、リジュは理解していた。

顔を上げると店の奥、清算台の前に立つ女がこすりをじつと見ている。

べつたりと重く張り付くような長い黒髪。感情を見せぬのっぺりとした顔。その女の唇が開いた。

今度はざわめきをすり抜けてまで声は届かなかつたが、唇の動きで何を言つてゐるかは読み取れた。

オマエハ ナゼ ヘイキナノダ

「失礼いたします」

「！」

誰かが腕に触れ、全身の力を使って勢いよく振り返った。

「驚かせてしましたわね。申し訳ございません。わたくし、この店の店主でござります」

薄紅色のワンピースで身を包んだ、上品な女性が目の前にいた。三十代後半といった所か。明るい色合の服に違和感を覚えさせない、温かな眼差しの女性だ。どこかほっとする。

「神学校の皆様がいらっしゃらなければ、わたくしも、お客様方も、誰もかも闇に墮ちてしまつといひございました。ありがとうございます」

「あ、いえ、当然のことなので…」

答えるながら、清算台へと手をやり、そして店内を見回す。最早店内のどこにもあの氣味の悪い女はいなかつた。

意識を現実へと取り戻すかのように、カラーン、と軽やかな音が聞こえた。

「あら、警備隊の方々ですわ。説明に参りますので、失礼いたしますわ」

リジューは店主と同じ方を見て、眉をしかめた。あの面々は良く知つてゐる部隊だ。

今、この時、この場所では、どうしても会いたくはない。

「あの、女性の店員が一名になくなつてゐるみたいです。ちゃんと身元とか、調べ直してもらつた方がいいと思います。その、偽装して

るんだと思つので」

店主は一瞬目を見開いたが、すぐに、分かりましたわ、と強く頷いた。

(さて、と)

少しの間警備隊の元へ進む店主を見送つてから、いまだにへたつている少女一人を見やる。

「オレは帰りたいんだけど、一人とも、歩けるか?」

「うん…大丈夫、だけど」

「あたしらも、説明しに行つたほうが、いいんじゃないの?」

エアルが顎をしゃくり上げて入り口のほうを指した。全く女らしくない行いだが、そんなところがエアルらしくて良い。

「 unnecessaryだ。オレ達が結界張りました、以外になんかあるか? それよりオレ、あそこに今は会いたくないヤツがいるんだよ」

エアル相手だと特に気楽に話せるせいか、言わなくともいいことまでウツカリ言つてしまつた。

「えつなに何!? あん中の誰? 男? 女!?」

へたつていたのは嘘かと思うほど、ガバッと上半身を起き上がらせた。好奇心全開である。

「リジュー君と、どんな関係なの?」

カリアーナまでコレである。ただし、ひりひり、表情がやや揺らいでいる。

「どんなつて……まあ」

失敗した、と思いながらも、ここまで来たらまあいかと答える。

「幼馴染！ 男だぜ？」

実はあの部隊には他にも知人がいるのだが、とりあえずこの店に来たのは彼の班だけのようだ。

「ふーん？ 会いたくないって、仲悪いワケ？」  
「いや……」

仲は良い。というよりも、物心ついた頃にはすでに傍にいたから、良し悪しを考える前に一緒に居るのが当たり前、といった感じか。二人の暮らす下区はいわば貧民街だ。生きていくだけで精一杯で、学にかけるお金など持ち合わせていない人々が住んでいる。だがそれを卑屈に思う者ではなく、また、生活を保障しない国を恨む者もない。むしろ、闇に屈することなく抵抗を続けるこの国を、誇りに思っているほどだ。

そして、外に出て戦う騎士達に憧れ、いつか自分もその位置に到達することを夢見て警備隊へ入る者が多かった。

城壁外で戦うのが騎士団。城壁内部を守るのが警備隊。もちろん外を往く騎士達の方こそ遙かに危険度が高い。

「仲は良いぞ。親友、だからな」

下区出身者であるひと、警備隊での活躍を認められれば、騎士に

なれる可能性があった。故に下団では、すでに「」の年頃のほとんどの者が警備隊に入っている。

リジューのみ、「」、入隊しないほつが珍しいのだ。

「じゃあ、どうして？」

「そりゃ…」

だからといって、眞、学校が嫌いでその道を選んだのではない。下団の子供たちは、行きたくても学校に行く金がないのだ。

残された道の中で自分の道を一つ選ぶ。その結果、たいていが警備隊へ入隊し、いずれまた別々の道へ進んでゆくのだ。

意識せずに溜め息が出る。

「…」の姿を見られると、ちょっとな…」

後ろめたい、と言つたら「」のか、「」の感情は。

周囲の誰もが学校に通うこととは不可能だった。ましてや神学校など、夢のまた夢、だ。たとえ金をどうにか用意したとて、下団の『家名なし（ななし）』が入学することはできないのだから。

「どうしてさ。あなたスポーツだから、胸張つてつやっこでしうが」

何も知らないエアルは軽く言つ。

リジューがどうして入学できたかといえば、リジューだけが持つ特権ゆえにだ。だが、それは一握りの人しか知らない。

「怒るかなー、とか」

「怒るに決まっているだろうが」

わざと低く抑えた声が、リジュの耳元を後ろからうねるよつて響かせた。

鳥肌が首筋を襲い、うひやっと飛び跳ねた。

「セ！ セ、セセ、セイ！？」

「お前のその格好」

この幼馴染の声は、普段はそう低いものではない。だが故意か意識せずにか、不機嫌な時には一トーン音程が低くなる。しまった。どうしよう。のんびりしそぎた。

リジュの心はこまや、真っ白というか真っ黒というか、混沌としていて何も言葉が出てこない。

「店主の言っていた、神学校首席。お前がそだとは、びっくりだ、リイ」

彼がリジュを『リイ』と呼ぶのは小さな頃からの癖だった。きっかけはハツキリ憶えていないが、まるで双子のようにいつも仲良く一緒にいたから、名前をお揃いにしたかったのだろう。セイの方に揃えたのは、『セジュ』では言いにくいが、『リイ』なら言こやすかつたからではないかと思われる。

「こっちを見るんだ、リイ」「う…」

別にリジュはセイのことを嫌つてもいないし、仲だつて悪くない。ないのだが、ただ、ちょっと時々苦手になる。主に怒らせた時などに。

ぎこちなく体の向きを変える際、カリアーナとエアルの様子が目の端に引っかかった。カリアーナはハラハラしているようだが、エ

アルはにやにやと楽しめた。いや、楽しんでいる、絶対に。

「ノヤロウ！」と、心の中で文句をタレル。

人の不幸を楽しむなど、悪趣味だ。

「ゴメン」

セイに向かひつゝ同時に早口で告げる。顔を見る」とは出来なかつた。

「…お前、俺がなぜ怒つてゐるか、分かつて言つていいのか？」

「えつと、オレだけ学校に行つてゐる、かい…？」

「ばかが」

「ゴソ、と軽く額を額に当てる。セイの方の背が頭一つ分高く、少し身をかがませてゐる。

「その程度で怒ると思つか」

呆れて嘆息する様子に、怒りは薄れたと知つて肩を下ろす。

「……俺に秘密を持つなど許さない」

「ごめん」

昔はセイに言えない事など何一つなかつた。

なのに今ではゴメンと口では言つても、全てを教えることは出来なくなつてゐる。いや、正確には出来ないのでなく、言いたくないだけか。

隠し事の何もかもが、自分の気持ちの問題だつた。

「後で、教会に来れるか？」　　話すから、さ

それでも隠し事が無くなる訳ではないけれど。

「わかった。後で行くから全部話せ。…それと、これに署名しちゃ

「何？」

「結界を張った人物の署名が必要なんだ」

サインをしない訳にはいかないだろ？

思案してみても、この書類に署名を貰わなかつたとして、セイの落ち度となるだろ？との結論に達した。

「……」

さらさらとサインをしてエアルへ書類を回し、視線を店内へ移す。だいぶ落ち着いてきているが、警備隊員達は各人事情を聞くのに忙しそうだ。そのため他の知人らはリジュの存在に気付いていないようなので、良かつたとも言える。

だがこの部隊は、セイが班長を務めるこの班一つきりではない。他の班員の姿が見受けられない、それは良い事とは決して言えなかつた。

おそらくは、今回の襲撃はかなりの広範囲だつたに違いない。被害が…全くなかつたとは、とても思えなかつた。

「リジュ・『ウイルス』？」

多分に疑問の含まれる声に振り向いたが、互いにそれ以上何か言うことはなく、リジュとセイはしばし見つめ合つた。

「いや…今はいい。ああ、結界は解除して大丈夫だ。店に入る寸前

に、騎士団帰着の鐘の音が鳴っていた

「騎士団…。姫さんが？」

「姫将軍かは知らないがな。見てみるか」

言われたが早いが、自ら動いたが先か。四人は自然と連れ立つて扉へ向かつていた。

「ねーカリナ、姫将軍と直接会ったことある?」

「うん。すこしだけなら、お言葉もいただいたけど…」

「うつそ、すゞつ。ね、ねつ、どんな方なの!…?」

女子一人はにぎやかだ。

そしてカラソンドアを開ける音。日を細めてしまひ陽の光と共に、一気に日常へ還る。

「うわあ

素直なカリアーナの簡単が耳を打つ。

「すつゞい、目の前!　いや一つ、あたしこんな近くで姫将軍見  
たことない!」

なんと言つタイミング。帰城する騎士団がパレードの」とく目の前を通つていく。エアルのように多くの者は歓声を上げて騎士団を迎えていた。

だが騎士団の掲げ持つ二色の旗。青色と黒。その色の意味するとこは……。

「村は守り抜く、が…」

「死者多し、だな」

勝敗に係わらず、犠牲のない戦いなど存在しない。

一軍を率いる将の様子を見てみると、凜々しく表情を引き締めて、じつと前方を見据えている。その瞳は揺らぐことなき青き湖水の色。頬の両側だけ長く伸ばされた、ゆるやかに波打つ黄金の髪が、硬く引き結んだ唇をなぞっていた。

遠くにいても、近くにいても、彼女は変わらない。

「さすがだな姫将軍は。どれほどの犠牲にも取り乱さず、か」「ちがつ」

無意識の反論。

「姫さんは、いつだつて泣いている」

どうして皆には分からぬのか。声に出さなくとも、涙を流さなくとも、彼女は泣き叫んでいる。尊い犠牲に慟哭しているというのに。

「リイ、お前…」「リジュ君は、ネスティア姫が、好きなの？」  
「え？」

聞いた内容を、理解するのに時間がかかった。想定外だった上、それを言つたのがいかにも言いそうなエアルではなく、カリアーナだつたから余計だ。  
なぜか三人の注目を集めていることにうつろたえる。

「…え…いや…。その、なに、あ…、別にそんなんじゃないと…思つ」

そのようなことは本当に今まで考えた事がなかつた。カリアーナはどうしてそう思つたのだろうか。

セイはリジューの肩を一度軽く叩き、

「まあ、俺達はまだ子供と言えるからな。深く考へることはないだ  
るひ」

なだめているように、慰めているようにも感じられた。

周囲のざわめきの種類が変わってきた。犠牲者を乗せた馬車が何台も連なってきたのだ。多すぎる死者に泣き出す者も出始める。戦いがあれば、必ず犠牲者は出る。けれど闇への抗いを止めるわけにはいかない。

いつまでも、涙はなくならない。

沈もうとする太陽の光が、世界を紅く染め上げていく。この時間の教会は静かだ。たいていの家庭が夕食の支度を始める時間帯だった。

リジューは皆と別れた後、セイが仕事を終えてやつて来るのを待つていた。

一人でいると、先の情景が頭に蘇つてくる。決して無くならない犠牲者達。

人々の哀しみの声が胸を焼いていた。

「せめて少なくする、には…」

「お前がいつまでも覚悟を決めないからだ」

「―――」畠田…」

今の今まで誰もいなかつた真横に、一人の青年が立つていた。  
どこにでもこなうつた平均的な風貌。だが地味な青灰色の瞳に見て  
取れる心は、どこまでも深い。

「と、まあ一畠田ならばさう評すだらうな  
「そうですね」  
「しかし、あまり気にするなよ、五畠田。あれはお前の責任ではな  
い」

彼は口元が歪んでいくのを自覚していた。

「だが、僕が覚悟をえしていれば、死ななくて良い命はあつたはず  
です」  
「今期はお前の役田ではないのだから、本来お前が覚悟する必要な  
どないんだぞ」

いいえ、と強い口調でもつて否定する。

「そもそもあの人があの役田を全うできなくなつた原因は、僕ですから  
だと理解していく、それでも自分は現状を維持したくてたまらない  
いのだ。

「五畠田、それは違う  
「あつがとうござれこまわ」

わわやべくひに 礼を告げぬ。田を開かして配を感じれば、いつ  
も温かな波動。

「一番田、貴方はいつもお優しい」

「いや、私はお前の指導神だからな」

何気なさを装つていても照れた気配は消しきれていない。  
いつだってぶっきらばんなようで、いつだって困ってしまうほど  
お優しい方だ。

いつもいつも甘えてしまって、最後の一歩を踏み出せないままで  
いた。

「人の死は悲しい。闇は哀しい」

だからもう、終わにしなくては。

「光は淋しい……」

「やうか……」

優しく、優しく、頭を撫でられた。

ああ、もう、幼い子供ではないといつこのじ。

「一番田、見守つてくださいますか」

「ああ」

指で髪を梳くよつに撫でてくれる。

「私はお前の、指導神だからな、弟よ……」

ああ、なんて嬉しい言葉だらつか……。

光は淋しい……。けれど、僕を導くこの光はなんて暖かい……。

キイ、と小さく開く扉の音。

リジューは一人立ち、声の届く所までセイが近づいてくるのを待つた。

(「めん…）

「……リイ？」

「うん、セイ…」

『めん、『めん、と心の中で何度も謝る。

「セイ、オレはさ、す『く欲張りなんだ

瞳を見つめて、決して目をそらすことなく。  
せめてそれくらいは誠実であろうと思つた。

「リイ?』

「貧しくつても、オレはじーちゃんとの生活がす『く大事だ。セイ、  
お前と一緒に居るのも、すつごく楽しくて好きだ。学校の友達も好  
き。活気あるこの国が大好きだ

セイが戸惑つているのが分かる。『話す』と言つたが、こんな風に切り出されるとまは思つていなかつただろう。

「人が傷付け合うのは嫌いだ。人が死ぬのは見たくない。誰かが闇に墮ちるのは、とても哀しい。 セイ、今日の襲撃で、多くの人が闇の手に墮ちただろう? オレの結界は間に合わなかつた」

「お前のせいではない」

間髪を入れずに返していく。

「お前は精一杯、出来る限りの事をした。神様とて『存知のはずだ』

優しい人に囲まれて、自分はとても恵まれている。

ああ、だけど、セイ。あれは『出来る限り』ではなかつた。本当に『出来る限り』の事をしていれば、誰一人闇に墮ちる事無くすんだ筈だつた。

そうして神様は、その事を『存知なんだよ。

「オレはもう何も失いたくない。何もかも手に入れたい」

そのために一歩進む決心をした。それでも皆には知られたくない。 気付かずにしてほしい。

だから『話す』とは言つたけれど、全ては話せない。

「オレの母さんは神子候補者だつたんだ。候補者となつた時に『家名』を授けられた。その家名を使用できるのは、本人の直系子孫だけだ

「ウイルス、か」

「そー。その家名にはいくつか特典があつて、神学校なら入学金やら何やらのお金が、ぜーんぶタダ、っていうのもあるんだ」

「それで神学校、か」

「オレは皆ほど剣技やら体術やら、上手くないしさ。神官職も悪くないんじゃないかな、とか」

「それだけ、なのか？」

「それだけ、じゃなこ。大変なんだ、これが。仕事全部辞めたら生きてけないだろ。出席日数減らさせてくれって言つたら、首席を取り続けること… 一度でも落ちたら退学… なんて条件出されちゃつたし」

「それだけ、なんかじゃない。  
だけどそれは秘密にしておく。

不審に思われているだろ？  
我ながら、いつも以上に饒舌になつてゐる気がした。

「では俺は騎士になる。こつかなつてみせる。その頃にはお前もきっと神官になつていいだろ？  
俺が戦つている時に敵の術に負けないよ？  
その時にはお前の術で守つてくれ」

「ああ…」

「お前には敵の刃一筋たりとも触れさせぬよ？  
俺が守つてみせよう」

「ああ、いいな、それ。守つて、守られて… そつなつたら、いいな…」

「…」

「……もう、何も秘密にするな

「ああ…」

何一つ秘密を持たずについたのは、ほんの少し前までのことだのに。  
約束を破る事無く過ごしていた、幼い日々がとても懐かしかった。  
それでも結局秘密を持ち続ける。ばれた時にはもつと怒られるだらうな、とも思つ。

けれど、この歩みは止めないと決意した。

## 決意の音色（後書き）

長々と読んでいただきありがとうございました。ここまで書いても、いえ、この先もまだまだ恋愛要素がないです…。それっぽさを少しずつでも入れてく努力をしますので、この先も読んでくださいね！

神の遊ぶ庭（前書き）

女のナガツカリで…すみません（汗）

あなたにおしえてあげたい  
憎しみを隠して 前を見据える  
あなたの姿の痛々しさを

この世界は病んでいた。

遙かな昔、『調和の時代』と呼ばれし過去、『偉大なる誓約者』が一人の神と出会い恋に落ちた。  
明るき世界を慈しむその神は、大樹を育てし『始まりの神』であった。

誓約者と始まりの神は契約を交わす。誓約者は、愛した神とのつながりの保持を望んだがために、始まりの神は愛した誓約者の子々孫々に渡る平穏を願つて。

誓約者は国民全てが未來永劫、正しき道を歩もうと誓い。  
始まりの神はその道を守るため、自らの系統より常に一柱の神を、  
誓約者の血統の元へ遣わすと誓約した。

人間と神という間柄の二人の恋人は最後まで清らかで、二人の交わした契約は純粹なものだつた。

後世の人々は何故にあのような事態となつたのか解せぬと首を捻つたが、いかに美しく清らかであつても、そこに罪があつた事は當時の人々の目には明らかだつた。

始まりの神には、暗き世界を愛でし妻神<sup>つまがみ</sup>がいた。妻神は心通わす一人を知り、おのれ末代までも許さじ、と反乱を起<sup>こ</sup>す。

ここに、神々の国と人間の国は共々に、光と闇へ一分されたのである。

あなたにおしえてあげたい  
哀しみを隠して 瞳を閉ざした  
あなたの心の美しさを

星々の輝きの中を、駆け抜ける小さな煌きがあつた。

純白のローブで身を包むその人影は、誰が見ても圧倒される程の存在感を放っていたが、あいにく柔らかな薄衣を頭から被つていて、その顔をることはできない。

どの道その人物は屋根と屋根とを高く高く飛び跳ねていたため、姿を見咎める者はいなかつた。

とても楽しそうに夜を駆ける人影は、結局誰にも気付かれぬまま、城の中へと消えていった。

鈴を転がすよつて、涼やかに意識を鳴らす。

ど・こ・に・い・る・の・で・す・か

求める相手だけに伝わる言葉だ。

体重を感じさせぬ軽やかさで跳ねながら、城内を巡る。

意識をどこまでもどこまでも響かせて、何度も何度も繰り返す。

……

やがて言葉にもならぬ反応を感じ取り、唯一あらわになっている  
口元に笑みが浮かんだ。

い・ま・い・き・ま・す

薄縁の間から時々垣間見える金色の髪が、廊下の所々に置かれた  
灯りを反射し、虹色に煌めいている。

楽しげに、ダンスのステップを踏むが如く、軽やかに突き進む。

じつちの角を曲がって、あちらの階段を昇り、そっちの通路に入  
つて行こう。そう、ここが神々の降りる場所。

は・は・う・え

屋内であるというのに、床一面には多種多様の花々が鮮やかに咲  
き誇り、中央に一人の女性が鎮座していた。

無心に花冠を作る彼女は、女性と言い切るには幼いようだった。  
無下に花を漬さぬよう、ふわりと近づく。

「…母さん」

呼びかけに対して顔を上げて微笑みはするが、目の前にいる人物を認識してはいなかつた。それは相手が彼であるうとなからうと変わらない。

それでも彼は笑顔を貰つて嬉しかつた。

「会いに来ました」

彼女の肩に顔を埋めるようにして抱き締めた。

彼女は抵抗もしないが、抱き返しもしない。ただぼんやりと抱かれるまま、時折花々を飛び交う蝶を見ては、無邪気な声を発してい る。

「遅くなつて」「めんなさい」

彼の額を飾るサークレットが当たつて痛かったのか、少しばかり身じろいだが、すぐに他のものへ気を取られてきょろきょろとする。

彼女の心が壊れていることは知つていた。

分かつていて会いに来たのであっても、やはり自分が彼女の中に存在しないのは悲しかつた。

抱き締めていた腕を離し、遊びに夢中になる彼女を見守る。

蝶を追いかけ、花に埋もれ、小鳥と唄う。

少女というほど子供ではなく、女性といつにはまだ早いその姿。けれど中身は幼児のように無垢で幼い。

一番田は優しさゆえに会つなと言つた。しかしそれを押して会いに來たのは自分の意思だ。

責は自らに有り、と知つている。それでも会いたかつたのだ。

「……そこそこるのは誰ー!？」

静かな時を、咎めるような女の声が切り裂いた。

彼は入り口に背を向けて座っていた。そのままの姿勢で返答する。

「ここは神の住処。人の国に在りて、神が降り、神が住まつための場所。故に、僕には咎められる謂れはなく、故に逆に問い合わせましょう」

女の声をどこかで聞いたと思いながら、彼はゆっくり立ち上がった。

「神なまざむ人の子よ。神の花園に立ち入る罪を犯す汝は何者か」「？」おまえは……？

怒りが沸くでもなく、ただ普通に声の主と向き合つた。向き合つて、ああなんだ、と心で苦笑する。声に聞き覚えがあつて当然だ。

「この者、いえ、この方は、神子……？」いえ……

戸惑い、自問自答する女は、両頬を長い金髪に挟まれている。

「すでに一柱の神が降りてこり……神子では在り得ない……まさか……？」いえ、まさか……

「弔いは終えたのですか？」

初めて見たその反応を新鮮に思いながら、瞳を覗き込めるほど近づいた。

「今は泣いていないのですね。泣いていないあなたを初めて見まし

た

彼女は湖水の色を持つ目を大きく見開き、

「私はいつも泣いたりしないっ」

心から彼の台詞に驚いたようだつた。

「人の死を嘆く、あなたを見ていました」

だけど、と繋げる。

「泣いていないあなたの方が、一層美しいのですね  
「ど、うして…」

誰も気付かず、あるいは本人ですら自覚していなかつた悲しみを指摘され、まともに言葉を返せぬほど、彼女はうろたえていた。

「戦があれば人は死ぬ。あなた方を、この国を護る筈の神子はある状態で、この城を包む結界を維持するだけでしょう?」

何故ならばあの神子の身体の主たる人間も、神子に憑依している神も、諸共に狂つてしまつてゐるのだから。  
結界一つ維持しているだけでも奇跡なのだ。

「あ、貴方、は…まさか…、受肉した、神…?」  
じゅにく

「僕はあなた方に力を貸すことになりました。今期の神子に代わり、  
僕がこの国を護ります」

「！なりません！ 契約が…！」

「大丈夫。僕に限つて使える手がありますから」

始まりの神と偉大なる誓約者が交わした契約は厳しくできている。

この国を護る神は常に一柱と定められており、一度神子に降りたが最後、いかなる状態であろうと、その神子の寿命が尽きるまで、器を変えることも去ることもできない。そして、他の神が助力すれば、たちまちその助力に見合ったペナルティが人々に降りかかるのだ。

だからこそ、神の助力を断らねばならないのだ。本心ではどれほど力を欲していようとも、それを押しのけて制止しているのだ。

けれど彼にだけは、助力のための手段があった。

肉体の隅々に意識を拡散させ、必要なだけの力を行き渡らせてゆく。世界で唯一、人間に最も近い彼だけが持つ能力・存在変換の力。

ヴェールのように被っていた薄衣がなくなり、あらわになつた顔に光る半眼の瞳には新緑の息吹が宿る。

消えずに額に残るサークレットの中心で黒玉くろだまが光を集め、絹糸のような黄金は虹色に輝き、人外の神秘を匂わせていた。

ローブは両肩から下がるマントへと変わり、人目に晒された純白の長衣は神官服を思わせる。長衣を飾る銀糸の紋様は『神紋』しんもんと呼ばれるものであり、神々が個々に持つ紋章である。

目の前で変化を見届けた彼女はのどを鳴らした。いかに術的能力を持たぬ身であれども、さすがに目前に立つ存在が、尋常ならざる力を持つ神であると理解できた。

「御名を、いえ、位階いかいをお教えくださいますか」「ハイラン」

強大な力を持つ神の中には、名を尋ねられることを嫌う者が多いと知つての気遣いが好ましい。

「ハイランの第五玉」

「た、大樹の守護神……！」

その身を襲うは、計り知れぬ驚愕の嵐。

神を待たせず立ち直つたのは、さすがと言えた。人々の上に立ち、導き、守る。そのために積み重ねてきた経験値が彼女を動かした。

「……お呼びする際は、どのように……？」

始まりの神が育てた、大樹ハイラン。大樹は世界そのものだと人々には伝えられている。

光も闇も、人間も動物も植物も、あらゆる全てを支えていると伝わる大樹を守護する任を負うのは、数多の神々の中でも片手で足りる数の神々だけだと云われていた。

それは事実で、なりたいという意志の下に守護神となるのではなく、その定めを持つて誕生した神だけがなるのである。もちろん役割にふさわしく、能力の大きな神だけがその役目を担つているが、能力の大きさだけで定めに選ばれているのではないようだった。

現時点において守護神として誕生したのは、始まりの神の子供達だけに集中しているが、彼らに勝る力を持つ姉神の一人は守護神ではなかつた。

「第五玉でも、五番目でも」自由に。呼びにくければ名を呼んでください。リージュと」

「御名を……？」

「リージュ・フィブロ・ハイラン。僕の名です」

彼女にとつては予想外の展開ばかりのようだ。  
目をくるくる回す、いつもよりも幼い様子に、思わずくすぐすと  
声が漏れてしまった。

「人々を守るために」

手の平を上に開いて差し出す。まるでダンスでも申し込むかのよ  
う。

「僕に協力してくださいますか、姫さん」

光の国の一姫ネスティアは、ためらつ事なく彼の手を取った。

## 神の遊ぶ庭（後書き）

未熟な文章ですみません…。できるだけ読みやすくしたいとは思つてますので、次回も読んでください。

## 薄闇の気配（前書き）

新キャラ登場。『薄闇の気配』なんて言ひてますが、妖しい出来事があつたりバトつたりするわけじゃありませんので。

夢を見た。

薄闇に満たされたその場所は思いのほか心地よく、

そこで誰かと出会い、何かを話した。

田覚めは静かだった。

何か夢を見ていたのは確かに、内容は覚えていない。夢はたいていそんなものだと言わればそれでお終いだが、やたらと気になつて仕方がなかつた。

「…まあ、いつか…」

そもそも着替えをしながら、あぐびを一つ。

今日は仕事の日だ。そろそろシャツキリ動かなくては。ぱん！

「うしづ

両頬を手の平で打ち鳴らして氣合を入れる。

「行くかつ

「おはよっ、リジュー」

「おはよっ、じーちゃん!」

すでに朝食の席に着いている祖父に、元気よく返す。

一見頑固そうな祖父だが、その実大の子供好きで、末娘の忘れ形見であるリジューを溺愛していた。少しでも元気のないそぶりを見せると、大げさな程に心配してしまった。だから一日の始まりの挨拶は、特に元気いっぱいにするよう心がけていた。

「朝食は、ノイノが作ってくれよつたぞ  
「あれ、あいつもう行っちゃつたのか。メシくらいやつくり食つて  
けばいいのに」

ノイノは従姉妹だ。祖父の長女の娘に当たる。

リジューよりも一年と半年ほど早く生まれたからか、姉貴風を吹かせたり、世話を焼いたりしたがる。朝食も、頼んでないのにちょくちょく押しかけ……いやいや、ありがたくも作りに来てくれるのだ。

「昨日の事件もあつて、忙しいようじや」

「ああ……」

「学校も同じ街区なんじやろ? しばらく休んだらどうかの……」

祖父は本心では、神学校に通つてほしくないのだ。末娘を神子候補として教会に奪われたあげく、成人することなく死なれてしまつたのだ。

それ以来教会に対し、不信といつぱりではないが、一歩引いて  
間に壁を持っている。

「ハの上、孫まで教会に取られるのではと、不安を抱いているのだ。

「大丈夫だつて。何かあれば、ちゃんと避難するし」

昨日の襲撃のさなか、現場に居合わせたのは祖父には内緒だ。ただでさえ年で足腰が弱いのに、さらに心労まで重ねるのは申し訳ない。

ノイノはセイと同じ部隊に所属しているが、事件後の調査に田を通すようなマメな性格をしていないから、彼女の口から祖父に伝わることはないだろう。一つの班を預かる長としてそれはいかがなものかと、以前から注意をしていた欠点がこんな所で役立つとはい。

「じーちゃん」いや、ちゃんと避難してくれよ。足とか痛けりや、近所の人助けでもらつてさ。怪我なんかしたら、オレ泣くからね  
「そう簡単に怪我するほど落ちぶれておらんわい」

普段は自分で足が腰がと言つてしまい、人に指摘されると途端に見栄を張る。

まつたくもう、じーちゃんらしいな。アハハ、と笑いあつ。

「ハサツをました、とー」

席を立つて、食器を片す。祖父のもまとめて洗つてしまつ。

「じゃ、行つてきまー。」「  
「氣をつけてな」

なんて事のないこの日常こそが、何より愛おしかった。

「リイ」

家の鍵を掛けたところへ、呼び止められた。

「セイ？ どうしたんだ、こんな時間に。ノイノはもう行ったけど、セイはこんなゆっくりしてて、大丈夫なのか？」

「あいつははりきり過ぎだ」

「そりや、あいつはそれしかないし」

ノイノはあまり頭が良くないことを自覚していて、とにかく剣の腕とやる気だけで上へ上がりとしているのだ。

二人は足並みを揃えて歩き始めた。

「それで？」

「一応報告だ。お前が店主に指摘していた、姿を消した店員のことだが、やはり身元詐称していたらしい」

「それじゃ、やっぱあの女が闇の輩を引き入れたとか？」

「それが違うようだ。騎士団が逃げる奴らの一部を捉えたのだが、どこの店舗にも一人も侵入させていなかつた、と言つているそうだぞ」

「ええ？ んじゃ、あの女、何もんだろう？」

「一応、今後も調査を続けるが、期待はしないほうがいいと思つぞ」「うーん……」

逃げたからには何かやましいことをしていたのだろうと思いついた。もしも襲撃の先発隊の役割を持っていたのなら、今後の防衛の作戦に役立つかもしれないが。

「……。あの後、正神父に結界について意見を伺った。とつさにあれだけの人を守れたのなら、充分なのだと、言つていたぞ」

「……そうか……」

「ただ、規模が……。学生によるものにしては、鍛度が高すぎるとか……」

「……そりや、三人合わせてたから……」

「残留していた気配を探つた神父が言つていたのだ。一人分の力はほとんど氣休め程度だと。ほほ、一人だけの力だと。……首席といえども、たかが学生に出来る事ではない、と……」

答えが見つからない。どう言えば追及を収めてくれるのか、分からぬ。

「……。だが、俺にとつては、お前が無事でいられるのなら、どんな力であろうと構いはしないな」

どうして、セイはこんなにも大人なのだろうか。きっと聞いただしたいに違いないのに、絶妙なところで引いてくれるのだ。同じ年だとは到底思えない。

「それから」

顔を見て会話をしようとすれば、背の低いリジューが見上げる形となる。時々行き過ぎて、顔でなく焦げ茶の頭を見てしまう。

今日もうつかり目線が頭まで行つてしまい、戾そうとしてふと、そういうえば、と真面目な話をしている最中だというのに、ぐだらな

い」ことが頭をよぎった。

外見など気にしそうにないセイだが、意外にも髪型にはこだわりがあった。短い髪をツンツン立たせているのだが、恐ろしいことにどんなに激しい運動後であるつと、豪雨の後であるつと、その髪型に一切の乱れが生じない。

いったいどんな整髪剤を使っているのか、はなはだ疑問に思う。稼いだ金を、高級な整髪剤などに費やすような愚か者ではない筈だが……。

「分かつていてはと思うが、ノイノは一切報告書関係を読んではいない」

「ノイノらしいよな。オレとしては、じーちゃんに何も伝わらなくて助かっただけ」

「じいさんには、昨日のことは言わないでいるつもりか」

責めるような口ぶりだった。リジュとて、自分が知らされない立場にいたら嫌だと思う。知らないでいるより、知っていて心配するほうが増しだと思う。

「だつて、じーちゃんは年寄りだ。心労で倒れたりしたら…」

「昨日のような事がある度、何も言わないでいるというのか？」

「……」

セイは立ち止まり、リジュの腕を掴んだ。強くはないが、逃れることを許さぬ意思を感じさせた。

「分かつていてるのか？ 昨日、闇に連れさらわれた人がどれほどいたか。分かつていてるのだろう？ いつ昨日のような事があつて、昨日のように防ぎ得ないかもしないと」

「…分かつてゐる…」

「ならば向き合つべきだろう。いつ誰が失われてしまうか分からないのだぞ。たつた一人の家族だろう。後悔したくはないだろうが」

リジューは感情に任せて、セイの手を振り払った。

「わかつてゐや…！」

セイの説教がグサグサ胸に突き刺さる。自分でも分かつてていることだ。この国の民、全てに平等に危険があるのだ。自分の力が足りない時が来るかもしない。自分の知らない所で、祖父がどうにかなってしまうかもしねり。

けれど祖父を目の前にすると、心配を掛けたくないという気持ちが先に立つてしまつのだ。

「喧嘩かい？」

二人の間に水を差したのは、幼い頃から知っている放浪師(はうろうしき)の男だ。放浪師は自らの腕前一つだけを頼りに各地を放浪し、見聞してきた出来事や暮らしの様子を人々に伝える職業だ。

騎士団や警備隊に常に守られている、ここ王都と違つて、各地に点在する村を守るものは巡回する騎士団だけだ。騎士団を各地に常駐させる余力は光の国にはすでになく、それ故に各地の村はいつ滅びてしまつてもおかしくなかつた。

このような世情の中自らの危険を顧みず、各地の様子を多くの人々の記憶に留めようとする放浪師は、多くの尊敬を集める職であつた。

「おっさん！」

「ハズロさん、お久しぶりです」

ハズロはいつもリジュの呼びかけには苦笑いする。五つかそこらの頃に、放浪師として駆け出しのハズロと出会つてからの付き合いだが、最近になつてようやくこの微妙な表情の意味を悟つた。  
まあ、誰でも三十路前に『おっさん』とは呼ばれたくないだろ？  
理解しても、今更呼び方を変えるのも、余計おっさんだと思つて  
いるようなので、そのままにしていた。

「やあ、リジュ君、セイ君。元気そうで何よりだ」

「ハズロさんも。今年もお会いできて安心しました」

「おっさん、外はどうなつてんだ？」

大人な挨拶はセイに任せて、リジュは好奇心を優先する。どの区民であれ、王都の人間は自由に外に出られないのだ。それに対して不自由も不満もないが、若さもあって進る好奇心は止められない。

「リイ。ちゃんと挨拶くらいしたらいどうだ」

呆れ顔のセイに、ハズロか気にするなど手を振つている。

「それより話したいことがあるんだよ。去年にした、モイド地方の話を覚えているかな？」

モイド地方は王都から最も遠くに位置する。つまりは、最も闇の国に近いということだ。一番危険に近い村人達は洞窟を利用するなどしてうまく隠れ住んでいたのだが、昨年ついに発見され、滅びてしまつたのだ。

「と、思われていたんだけどね。なんと生存者達が寄り集まり、新しい集落を作つていたんだよ！」

「へえ！」

「それはすごいですね」

普通はその地で暮らすのは諦めて、王都まで逃げてくる。ほとんど人が財産をすべて失った状態でやって来るため、下区に住むしかなくなるのだ。

「いやあ、あの地方の人達は強いよ」

それは王都から遠い地で生きてきたから可能なかも知れない。逃げようにも、王都への道のりはあまりに遠い。ならば生まれ育つた地で再出発しようと考えたのだろう。

しかし家を壊され、親しい人を奪われ、それでもめげることのない生き様は素晴らしい。果たして王都に住まう人々は、同じように自分を失わずにいられるだろうか。

「王都では、何か変わりは？」

話を聞いて、話をする、というのが放浪師との付き合い方だ。このようにして手に入れた話を持つて、放浪師は各地へ旅立つ。

「あつた、あつた。昨日な！」

「こいつが巻き込まれました」

「ええ！ 大丈夫だつたのかい？」

「ご覧のとおり、ピンピンしていますね」

「何があつたんだい。そういうえばさつきの喧嘩、昨日がどうとか言つていたね」

そんなに大きな声だつたかと冷や汗を流す。祖父は耳が遠くなっているし、家の中までは届かなかつただろうが、気をつけねばなら

ない。

「人狩りですよ、闇の人狩り」

セイが忌々しげに吐き捨てた。

「街区の商店街が狙われました。下区寄りでしたが、高級店が並ぶ地域だった。一番にぎわう時間帯だった。絶対にあらかじめ調べて、計画を立てたに違いない……！」

セイは興奮のあまりに丁寧な口調を忘れてしまっていた。

「だけどリジュ君がこうして無事だということは、他にも助かった人がいるんだろう？」

「まあね」

「綿密な計画が、どうして失敗したんだろう……？」

「失敗つて」

随分な言い方をするものだ。喜ぶところを、どうして失敗してしまったのか、などと。しかも助かったのは一部の人だけで、同数以上が持つていかれたというのに。

「失敗じゃないんじゃないかな？ 助かった方が少ないんだし」

「リジュ君、君が助かつた原因はなんだい？」

「原因で」

ますます嫌な言い方だ。相手をしているのが短気な性格だったら、今頃トラブルに発展してゐるんじゃなかろうか。

「偶然ですよ。こいつが助かつたのは、偶然神父が居合わせたから

です

セイは少し落ち着いたようだ。

「神官職が、高級店に？」

「あの辺りは、高級店だけではありますよ」

「オレだって、巻き込まれたし」

「確かにね。随分な偶然があつたものだね」

「……」

なんというか、こいつ、この人は色々気をつけたほうが良いのではなかろうか。

「あー……、おっさん、あのさ。オレ達仕事に行かないと……」

大の大人に話し方をレクチャーするのも気が引けて、つい逃げを打つてしまつた。実際にそろそろ出ないとまづくはあるのだが。

「ああ、そうか！ 引き止めて悪かつたね。… そういうえば、リジュ君はどこで働いているのかな。セイ君は警備隊だつたよね」

「そうです」

「オレは今日から城……で……」

ハズロの目がキラリと光つた気がした。もちろん怪奇現象では在るまいし、実際に目が光るわけがないのだが、つまりは目をつけられた気がしたのだ。うまい話を聞いたぞ、と。

「それじゃ、今度時間があるときに、また話をしようつね

「あ、ああ……」

セイが会釈するのを皮切りに別れることとなつた。

余裕を持つて家を出てきたのだが、今の会話でだいぶ押してしまつて、仕事場に向かう前に、一箇所寄る所があるので、少し急がないとならなかつた。

「城で働くのか？」

「うん、紹介してもらつて……。ああ、結界の件、話さないでくれてサンキュー」

「放浪師に話したら、すぐ話が広まるからな」

セイと話をしながらも心あらず、だった。抜けない棘のように、何かが心に引っかかるつていふ。

「リイ？」

心惹かれるままに、後ろを振り返つた。

しばらく探し求めて、離れた場所で見知らぬ男としゃべつているハズロを見つけた。行商人、だろうか？ 行商人は巡回騎士団について各地を回る。年恰好はハズロと似ているが、放浪師と行商人の間に共通点はないように思えた。

とはいへ、話をするのが放浪師の役目ではある。

「…………」

あの放浪師とは長い付き合いだ。昔から、分かりやすく飽きないように話してくれたし、支離滅裂な子供の話もしつかり聞いてくれた。信頼の置ける人物だ。

なのに、何がこんなにも気に掛かるのだろうか。

「何か気になることでもあるのか？」

セイには分からぬいよつだ。あの、なんとも言えぬ違和感が。

「……。いや、多分… 気のせいだ」

思い返せば、彼はいつも闇の失敗部分を気にかけていた、など、  
きつと氣にすることではないだろう。

そう思いながらも、見たくない部分を蓋で隠していくような感触  
が消えることはなかつた。

## 薄闇の気配（後書き）

実は主要登場人物の各ルートがあります。それぞれのエンディングもある程度考えてるので、このルート（誰のルートでストーリーを進めてるかは秘密です）でこの人を動かして、とか、あいつの考えを表にして、とか、整理するのが大変です。おかしな流れにならないよう、気をつけますね。

## 光と闇の狭間（前書き）

光の国を愛しているけど、不満はある。  
感情が乱れてうつかりお友達にハツ挡たりしちゃった感じの回ですね。

## 光と闇の狭間

王都の区分けは、単純に定められている。

中心に広大な庭に囲まれた王城がそびえ建ち、その周囲には内壁と呼ばれる第一の壁があり、堀が掘られ、さらに鉄壁の守りとなる外壁に囲まれていた。人々は外壁までを王城と呼んでいる。

王城の周囲に、上区、中区、街区、下区の順で広がり、最後に三重の城壁が守りを固めていた。

上区に住まうは上級貴族および一部の中級貴族、中区には中級・下級貴族および大商人や一部の騎士達、街区には一般的な商人や騎士達が住んでいる。財産が一定の水準に満たないものは自動的に下区に住まざるを得なくなり、下区の住人は中区以上の区画への許可なき立ち入りは認められていない。しかし商店や学校・公共施設などの主要施設は街区に集中しており、それに対しても不満を述べるのは一人といなかつた。

「うん？ 城に行くのではないのか？」

警備隊の本部は街区と中区の境にある。城へ行くのであれば、警備隊本部までは同じ道のりになるはずだったが、リジュは途中で道を外れようとしていた。

「ちょっと、教会に用があるからわ」

「そうか。……昨日のよつた事がまたあつても、あまり無茶はするな」

「うーん。んじゃ、またな」

ハツキリしない返事のまま、その場で別れた。

あのような事がまたあれば、何もせずにいられないだろう。何らかのその行為が、自分にとつては無茶でなくとも、他人から見れば無茶にしか見えないこともあるかもしれない。

心配はかけたくないから、彼らの前で力を使う機会が一度と来なければいいと願った。

それにしても、おかしなものだ。本来ならば自分こそが、危険な職場に勤めるセイを心配する立場にいるはずなのに。

ゆつたりと歩いていると、刻を知らせる鐘が鳴り始めた。余裕を持つて家を出てきたはずだ。放浪師と立ち話をしたせいで、それからもう、半時は経ってしまったのか。

ここから教会に行くには商店街を一つ通り抜けねばならないのだが、不規則に入り組んでいるためわりと時間が掛かるのだ。リジューは遅刻しないよう、足の回転を早めることにした。

目的の教会は王都で最古の歴史を持っている。

最古ゆえに最も外觀が古めかしくこじんまりとしていたのだが、四百年ほど前に神学校が併設された際に増築され、今では中区に建つ教会に次いで二番手の規模を誇っていた。

この教会を仕切る神官長は、若い頃城の神殿に仕えた経験があり、神子候補として城に上がったリジューの母のお世話を担っていたらしい。そのためリジューのことを赤ん坊の頃からずっと気にかけており、リジューが神学校に進む前も後も、勉学や私事の強い支えとなってくれた。

「昨夜、城から急使が参りましたよ」

四十を過ぎたばかりの年齢だけを見れば、このよつな大規模な教會の長となるには早すぎるのだが、彼の落ち着いた立ち居振る舞いを知れば、彼の地位に異議を唱えるものは現れなかつた。

「お勤め先は主務省しゅむしょう・主計課しゅけいかへ変更と、学校の事務手続きは済んでいます」

「いつもありがとうございます、神父様」

「礼など、貴方はよいのですよ。それからいつもお願ひしていますが、神父という言葉は女性の神官への差別に繋がりますから、今後はお気をつけください」

「この国では珍しい黒い髪に白髪を混じらせ始めた神面長は、ただ優しいだけではなく、注意すべき点はきつちり注意する人だった。

「うふ

甘やかしてもくれるし叱つてもくれるこの人を、リジュは父親のように思つていた。

「あくまでも、主務省へのお勤めであり、神殿とは向ら係わりはない」と

「表向きはね」

「職務によつて『帰宅できない』ような口は、お早めに『連絡ください。私が責任を持つておじい様への連絡と、学校の欠席届をお出しますから』

「うふ」

父とも慕う相手に何一つ隠し事の必要がないということは、気持ちが楽だった。無条件で自分の味方であると確信があり、授業の後や仕事帰りによく教会に入り浸っていた。

「私も共に城へ行ければよいのですが…」

「あははっ、心配性だなあ。でも神官様と通つてたら、神殿と無関係だなんて見えないだろ」

両親がいなくとも卑屈にならずに済んだのは、自分を溺愛する祖父だけではなくこの人もいたからかもしれない。

「どうかご無理はなさいませんよ!」

「分かつてゐるよ。行つてきまーす」

教会内部に居る方が、今の自分は生きやすいのだと、とうに自覚していた。

友人達に自分の秘密を全て晒せば、皆腫れ物に触れるかのような態度に変わってしまうだろう。教会内部であれば、すでに全てが明らかにされているから、はばかる事無く自由気ままに生きられる。少なくともあの神官長だけは変わらないのは確定なのだから。

だけど楽だからと書いて、そちらを選べるほど心は単純には出来ていなかつた。

結局のところ、セイに告げた通りに欲張りなのだ。  
全て失くしたくない。全て手に入れたい。

「リジュー君ー！」

教会を出たところで呼び止められた。

「カリアーナ?」

今日はよく誰かしらに声をかけられる日だ。

「もしかして、待つてた？」

「あ、あのね、教会に入つていいくのが見えたから待つていれば会えるかと思ったの」

紅潮した頬で、早口で一気に喋り切つている。

話す時に、よく顔を赤くする子だと思う。他の人と話している様子は普通に見えるが、大体が相手は女だから、もしかすると男相手では緊張してしまつかも知れない。

「どうかしたのか？」

挨拶だけでは、いつ出てくるか分からぬ相手を待つたりはしないだろう。しかし、冷たいことを思うようだが、あまり時間の余つていない今、長く掛かるような話でなければいいのだが。

「あの、昨日行つたお店に、今日買いに行こうと思つているの」「そつなんだ？ オレは一緒にに行けないけど、何にするんだ？」

きつぱり、行けない事を伝えておく。エアルがこの場にいたら、冷たいとか何とか文句を言いそつたが、生憎この場にいるのは大人しく、いささか引っ込み思案なカリアーナだけだった。

「う、うん…。リジュ君が見つけてくれた留め具にしようと思つて」「そつか、気に入つてもらえればいいな

目の前で寂しげにされて、一体どうじるというのだろうか。買い物に付き合つた理由は、彼女の婚約者への贈り物を選ぶためだ。友

人としての義理は果たしたはずだ。

それとも、後押しをしてほしかつたのだろうか。

「カリーアーナ。君はそんなに婚約者が嫌いなのか？ 結婚したくな  
いほどに？」

「え？ いいえ、まさか。の方は良い方だわ」

「では、婚約を破棄したいほど、好きな相手が？」

「婚約破棄だなんて、そんな…。好きな、人はいるけれど…」

家に決められた相手との婚約に従いたくないと言うなら協力も考  
えるが、本人が最終的にその婚約者と結婚することが当たり前だと  
考へているのだ。自由な恋愛の出来ない青春は可哀想だとは思うが、  
だからといって、好きだという誰かさんに彼女を紹介してやること  
は出来ない。彼女が婚約者との結婚を納得している以上、破局する  
のは決まっているのだから相手に失礼だ。

カリーアーナはその辺りをどの程度真剣に考へているのか。しかし、  
望むなというのも酷ではあった。

神学校には、十歳から二十歳までの間に入学し、二十五歳までに  
卒業することが求められる。つまりは多少の差はあれども、恋愛などに興味を持つ年頃の青少年達が集まっているということだ。神職  
につく者達は貞節を求められるとはいえ、恋愛・結婚が禁じられて  
いるわけではない。真剣であれば良し。その考への下、学生同士の  
カップルも自然と誕生していた。

そういった幸せそうな恋人達を隣に見て、自分は何も望めないと  
なればかなり辛いものだろう。

カリーアーナさえ願えば、友人として惜しまず協力するつもりであ  
つた。

「君はどうしたい？　君はオレの大切な友人だ。君にとても好きな相手がいるなら、協力したいとは思つてる。だけど、カリーアーナ。それは君が望まなくては、どうしてやることも出来ないんだ」

「大切な…友人？」

「ああ。だから敢えて言わせてもらひつ。今だけ、結婚までの間だけを相手に求めるのはよせ。婚約者と結婚するつもりでいるなら、婚約者以外を好きになるのはやめろ」

「！？」

「そのつもりでいたのか？」

カリーアーナの、驚愕して言葉の出ない様に、溜め息をつきたくない。本当に一度も思いつきはしなかつたのだろうか。それがどれ程相手を侮辱する行いであるのか。

「だつて、誰かを好きになつたからつて、婚約破棄だなんて、そんな利己的なこと…、光の国の民として相応しくない行いだわ！」

「利己的だつて？」

「これだから光だけのヤツは……！」

「それじゃ、何年か好きな奴と付き合つて、婚約者と結婚するからつてそいつを捨てるのか？　それこそが正しい行いだつて言うのか！？」

「そ…」

「それは利己的でないつて言つのか！」

これは光の国全体に広がる、病のようなものだ。

自らの利益だけを追求することを許さず、犠牲的精神を要求する。けれども誰一人としてそれを苦痛と感じるものは存在しないのだ。定めに逆らうことは罪悪だと、道から外れることは、闇へと墮ちる

事だと。

だからこそこんなにも身分差の激しい国で、どこからも不満が上がらずに平和を享受出来るのだ。

死と隣り合わせの貧しい生活を送る者も大人しくそれを受け止めて、より上級の暮らしを望もうともしない。

生まれ出でる矛盾にも気付かず、こんな未来のない精神こそが祝福された光の民の証なのだと、誰もが心から信じているのだ‥！

おそらくは、将来カリアーナに捨てられる誰かさんも、その時が来れば彼女が婚約者を取るのは正しい事だと、素直に納得することだろう。恨みも嫉妬も抱く事無く。

憎悪・嫉妬・驕慢・快樂の追及‥。そういう物はすべからく闇の精神なのだから。

「でも‥。でも、誰かを好きになる気持ちは止められないわ‥！  
リジュ君だつて、そういう事あるでしょ‥！」

「止まらない気持ち？」

お腹を抱えて笑いたくなる。いや、実際に笑つてしまっていた。はは、と乾いた声が漏れる。

「友達はみんな好きだよ。家族は大好きだし、愚かで情けない人もみんな愛おしい。嫌いな人間なんていないかもな」

ははは、と乾いた笑いは続いている。

「だつたら、どうしてそんな風に‥」

「だつて、カリアーナ。君が言つてるのは違つだろ。恋愛感情、だろ？」

誰かと出会い、子を成して、息を引き取るまで共に生きる。それ  
らに伴う、重要な感情。

「ムリだよ」

人が誰かを愛することは大切なことだ。人は一人では生きていけ  
ない。共に生きる誰かを求め続ける。それは理解できている。  
けれど、自分がそうかといえば別の話だ。

「オレが一人の人間を愛することなど、ありはしない」

たつた一人を心の底から愛する。

憧れはするけれど……それは、無理なのだ……。

## 光と闇の狭間（後書き）

無理だと言つても、いざれ誰かとくつつくわけですよ。ひとりだけを愛せないと言つてるリジューが、誰かを愛するようになる。その流れをうまく表現できたらいいなあ、と思つてます。

## 理の枝（前書き）

送信時にHラーが発生して、一度消えました…。

いつか教えてあげたい

その痛みは

隠すべきではない 大切な心なのだと

「申し上げます！」

神将しんじょうと各將軍との顔合わせを行つていた広間に、下級騎士の報告が響いた。

「ユワム地方戦場において、巡回騎士団がほぼ全滅！ 救助に向かつた姫殿下が孤立しております！ ご助力を！」

「姫將軍の残存戦力は？」

「およそ百かど…！」

顔合わせの仕切りを副将に任せて何をしているのかと思えば、自軍の戦力を半分残した状態で救助に向かうとは、自らの持つ力を思い上がっているのだろうか。

「私が行こう」

右赤騎士団を率いる將軍が立ち上がった。リージュも共に立つ。

「神将閣下？」

「準備に時間が掛かるでしょうから、僕が先行して姫將軍の下に向かいます」

すぐに動き始めると、一人の青年が後を追ってきた。

「お待ちをー 私をお連れくださいー！」

本日初めに、姫將軍の副将によつて紹介された青年だ。神將の副官となるべく、軍人から騎士階級へと復位したらしい。神將の補佐となり、神將不在の際にはその代理として軍を率いる。

名を確か、

「ティッカードと言いましたよね。足を引っ張らない自信がありますか」

ちらりと、半歩後ろを走るティッカードの全身を確認する。戦闘は予定外だったので、わりと軽装備だった。

「お役に立つてみせます

「ならば許可します

厩舎にて俊足の馬二頭を借り受ける。

「姫將軍は国民の心の支え。僕の補佐より彼女を守ることに専念してください

「……はっ

「しかし、本当に無謀な人です」

鎧に足をかけて乗り上げながら言つロージュに、

「殿下の闇への愁いは大きくていらっしゃいます」

神妙な顔で答えるティツカード。

「愁い？」

リージュはさらに言葉を発するが、一頭の激しい嘶きや駆け足の音に打ち消されて、ティツカードの耳には届かなかった。

(そうではない)

否、人々のための愁いもある。だが、それ以上に大きい個人的な感情が、彼女の中には在る筈だ。

心を焦がすような強い感情を、彼女は己が意志で厳しく律していに過ぎない。全ては、光の民に相応しくないが故に。

(だからこそ、彼女を…)

失うわけにはいかない。救わねばならない。導かねばならない。彼女が悲しみというゴーハークで、ひた隠しにする憎悪に気付かぬ振りをして。

(彼女を守る)

光と闇を内包する、希少なる存在。リージュの望む未来に、彼女が必要なのだった。

「姫さん！」

周囲は剣戟の音が木霊している。神将として戦場に立つ以上、声を荒げて味方の不安を煽るような行為は避けるべきだつたが、この混沌とした戦場の中では大声を出さねば相手に届かない。

敵に拡散されていくつかの集団に分かたれたようだが、報告を受けたときの人数からさほど減つてはいないようだ。

「僕は先に行く」

よりによつて、一番味方の人数の少ない集団に姫將軍がいた。隣を走る副官に一声かけ、リージュは馬上を蹴つて空高く舞い上がつた。

「理の枝よ」

騎士達の頭上を飛ぶリージュの手の中に、小振りの木の枝が召喚された。それは見る見る両手剣へと姿を変えていく。

剣を両手でしつかりと握り締めて、そのまま大きく振り降ろした。

「ギャツ」

姫將軍の背後から近づいていた敵の剣を弾き、その勢いに負けた男は遠くへ吹き飛んだ。

「大丈夫ですか？」  
「かたじけない」

言葉遣いに気を回す余裕すらないらしい。

横手から投擲された小剣を刃表で防ぎ、その隙を狙つて逼迫して来た敵の腹を右足でけり飛ばす。反対の敵が頭上から細剣を落としてくるのを剣の柄で防御し、一つステップを踏んで姿勢を正した後、相手の膝を狙つて蹴りこんだ。

騎士のようなお上品な剣技は持ち合わせてはいないが、一切気にはしていなかつた。

ギチギチと耳を搔き鳴りたくなる嫌な音がしたかと思うと、それはネスティア姫が敵の刃を己が剣で防いでいる音だった。震えていわんと苦痛にあえぐ顔を見る限り、防ぐのが精一杯でそれ以上押し出すことは出来ないようだ。

リージュはその敵の背後へ回り、こちらへ反応する前に素早く、肩から腰にかけて斜めに斬り捨てた。

「？」

今の敵の反応の鈍さでは、彼らは強敵とは思えなかつた。

「どうしたのです、姫さんらしくない  
「魔術、が……」

肩で息をする姫を敵の攻撃から庇いつつ、精神を集中すると、確かに戦場から少し離れた位置に魔術師の団体を感じした。

能力低下系統の術をかけられていると思われるが、そのわりに騎士達は健闘している。元々の能力に大きな差があつたのだろう。

「せい！」

氣を込めて横一文字になぎ払う。周辺に集まっていた敵が、悲鳴と血飛沫を上げながらバタバタと倒れていく。

「枝よ」

敵部隊との間隔があいた隙に、両手剣を地面に突き刺し短く唱えると、刀身が淡く光り始めた。

「理の元に異法<sup>いほつ</sup>を解除する」

剣から淡い光が靄のよつに溢れ出て、戦場一帯を覆いこむ。

(見つけた)

魔術の影響下にある場所を、一筋の差異もなくぴったりと靄で包んで、

「淨法<sup>じょうほう</sup>」

シャン!!

鈴の音に似た音が空間に響き亘ると同時に、自然な状態を取り戻した。

(……っ)

腹を針で刺したような微かな痛みは無視する。

敵の戦士達は魔術が解除されたことに呆然として隙だらけだが、魔術師達は優秀だ。自分達の術が無効化されるや否や、すぐに次の魔術の詠唱を開始していた。

「四方に葉を配置する」

本来の力を取り戻した騎士達が反撃を始めるのを横目に見ながら、四方へと意識を流す。

四月に芽生える若葉を、四枚イメージして地中に沈めていく。

「閣下！」

ギンシと、ようやく我に返つた敵がリージュに向けた攻撃を、ティッカードが下段から防いだ。

「ありがとう」

守つてもらわなくとも問題はなかつたが、捻くれずにここは素直に礼を言つた。彼の善意なのである。その頃やつと頭の隅で、四方に埋まる葉と葉が繋がるのを感じ取れた。

「葉壁始動」  
はぐき

先ほどのよつに音はなく、目に見える変化もなかつたが、発動してまもなく轟音を伴つて、遠くの四方が真つ赤な炎で染まつた。

「なん……？」

ティッカードが大声を出しながらも、魔術と防壁の攻防で発生した振動から護るつと、リージュの肩と背中をしっかりと支えていた。

「僕は普通の子供じゃないから、大丈夫ですよ」

遠方に視線を投げていたティッカードは、それを聞いてはたと振り返り、自分の行動に赤面した。

「も、申し訳ありません。つい  
「いえ。気持ちは嬉しかったです」

自分の副官とはいって、ティッシュカードについてあまり多くは知らない。何しろ今日紹介されてからこの戦場に来るまで、直接話す機会はほとんどなかつたのだ。

だが、見た目から、彼の年齢は二十代後半から三十歳くらいではないかと思える。その年齢の者から見れば、見た目は十五歳の自分は保護すべき対象となってしまつただろう。最も、リージュは見た目だけでなく実年齢も十五なのだが。

「閣下、援軍が参りました」  
「右赤将軍ですか」

周りを見れば敵の戦士は呆然としている。炎術魔法を防いだあの派手な光景を見て、ほとんどが戦意を喪失してしまつたことだろう。事ここに至つて、援軍は無用な長物となつた。

「ティッシュカード、伝令を。『無用の殺戮を禁ず。戦意無き者は』……  
「閣下……？」  
「……なんでもない。『戦意無き者は捕虜とすべし』、復唱」

心配そうに顔を覗くひびきする副官を制し、内容を復唱させる。

追い払つよつに通達に向かわせて、ゆつくりと息を吐く。腕が無意識のうちに、腹から胸に向けておする様に動いていた。

## 理の枝（後書き）

戦いをうまく書くセンスが欲しいです…。

## 反動（前書き）

所々に入る、三行ほどの短い文は、色々な人の想いです。  
誰から誰への想いかは表明しませんので、想像してみてください。

## 反動

「お待ちかねださい、閣下」

城内に用意された私室に入ろうとするリージュを、ティックカードの張り詰めた声が引きとめた。

「なんでしょうか」

「……祝宴に出られない理由は、本当に先ほどの通りですか」

戦勝の祝賀会は、長時間人に関わると制約に抵触する危険があると、固辞していた。

「本當です。祝宴に出たがためにペナルティーを受けてしまっては、本末転倒でしょう?」

「……戦場で、お怪我をされたのでは……?」

大げさに手を見開いてみせる。

「傷一つ負つていません。あなたが護つてくれましたから」

わざとらしく身体を動かしてみせるが、疑いの眼差しは消えない。そんな彼の身体の向きを無理やり変えさせて、背中を押し出した。

「ほら、宴会が終わってしまいますから。僕の代わりに楽しんでください」

再び振り向かれる前に、素早く部屋の中へ入ってしまう。

ドアに背を預けてズルズルと座り込み、副官の気配が完全になくなるまで身動きを取らずにじっとしていた。

「意外に鋭いんだな……」

右腕が腹から胸までをさする。

「それに、制約も意外と厳しい……」

この持続する痛みは、契約違反のペナルティーだ。神子以外の神が助力した場合のペナルティーは、本来ならばこの国に対して発生する。それを、リージュは自分に降りかかるように無理やり曲げていた。

しかしあの程度の呪<sup>じゅ</sup>一つに反応するとは、予想外だつた。

そもそも神であれば、言葉を発しなくても想うだけで呪は成立するのだ。それをわざわざ呪文を構成してまで用心したというのに。

(慣れよつ……)

理の枝から生まれた剣で敵を倒すことには、制約は反応しなかった。だが、この先呪を使わずにいられるとは限らない。ならば痛みに慣れるしかない。

(大丈夫だ……大丈夫……)

それでもきっと、これは他の神よりも緩い罰なのだ。  
どうせ今更やめる訳にはいかないし、やめるつもりもない。何よりリージュはこの為に生まれてきたのだ。  
そう、だから慣れるしかない。

(うん…大丈夫…)

共に、と願つきつかけは  
きつと、誰も意識せぬほどに  
ほんの、それやかなことなのだつ

祝賀会はにぎわっていた。

例え巡回騎士団一つ潰されようとも、闇の軍を追い返す事が出来たのは、この国にとって勝利と言い切れるほどの出来事であったのだ。

しかしその明るい会場の中、ティッシュカードは顔色を暗く沈めていた。

「どうした？ 隨分と暗い顔をしているではないか」

祝賀会も中盤に差し掛かる頃、ティッシュカードに話しかける女性がいた。他の女性たちのように無駄な宝飾は一切身に着けず、それでいて上質な光沢を持つ生地によって、自身の美しさを誰よりも引き立たせている。だが、その口から出でてくる言葉は無骨な男のようだ。

「……これは、姫殿下。この日出度き夜に殿下にまみえし…」  
「うつとうじい挨拶はいらぬ。それより、いかがした」  
「は…」

「気にかかる……か？ あの方がここにいらっしゃらない事が。ならばお前はここで何をしている」

「それは」

祝賀会に出ない理由におかしな所はない。なのに気にかかるのは、戦場で見た最後の表情のせいだ。何かを抑えるような、堪えるかのようだ。

「ティックカード、あの方のことなどをどのように聞いていいる？」

「個人的に神の寵愛を受けていらっしゃるため、神々ほどには契約違反の懲罰を受けずに、授けられし御力を揮うことが可能である」と。さらには神子様同様不老となられている為、外見よりも御年を召されているとも

「うむ、そのように発表されている」

「『発表されている』？」

それではまるで、眞実は別にある、と言つていいのかのようだ。

「あの方は幼くていらっしゃる」

眉を顰めて問うティックカードに対し、姫将軍は言ひ聞かせるように話し続ける。

「私では駄目なのだ。あの方は私の知らぬ私の本心を知つておられる。故に、あの方にとつて、私は庇護対象でしかない。だがお前は違う」

淋しそうな眼差しだった。

「お前はあの方の副官だ。私がいくら感謝の気持ちを伝え、御恩を

お返ししたいと願い出ても、の方は受け付けてはくれまいが、初めからの方を補佐する者として目通りしたお前であれば、御傍にあることを許されよ!」

「御傍にいたいと願つて許されますか」

「言つたであろう。の方は幼くていらっしゃる、と。の方は我らを安全な処に置いてでも御守りくださるが、我らが距離をおいての方を孤独にすることが正しいと思つた? 御心が傷つかないと?」

ティックカードはすぐにでも神将の元に駆けつけた想いに駆られた。どうして独りにしてしまったのか。力があるからといって、心がないわけではないというのに。

あの表情を見時、何か只事ではないと感じた。感じながら神将の言葉に従つて、こんな所に一人で来てしまった。

命令に従うだけが副官の役目ではないと、自分は知つていたのに……!

「姫、御前を辞することお許しください……!」

「許すも何も、行けと言つていたつもりなのだがね?」

姫将軍の言葉を最後まで聞いたか聞いていないのか。すぐさま走り去る後姿を、姫は暖かな微笑みを浮かべて見送つていた。

## 反動（後書き）

一回のストーリーが、短くなってきたら、かも…？  
が、がんばって書きます。

## 絆の芽（前書き）

作り置きしていた部分がぞっくくり消えました。何話分消えてしまつたのだろう（泣）

これからは小まめに保存しとこ。

書き直しているので、今回からは何度も分けて更新すると思います。

薄闇の夢を見ていた。  
そこの理はとても自然な状態で  
呼び声の持ち主が見知らぬ者である」とすら  
気にならなくなっていた。

トントン

求めに応えて腕を上げた時、  
意識の端を何かが掠つた。

ドンドンドン

誰かが『オレ』を薄闇から引き剥がした。

ティックカードはある部屋のドアをノックしていた。神将の部屋の  
ドアである。

幾度ノックしても応答はなく、最早叩くといつよりも殴っているかの騒音だった。

まさか倒れているのではないかと想ひと気が気がではなかつた。

「閣下？」

『まさか』と思つても、あの幼い外見を思い出すと否定しきれない。外見通り本当に幼いのであれば、やせ我慢をしてくる可能性が否めなかつた。

「……閣下……」

礼を失する事だと理解しているが、試しに扉を押してみると、キイと小さく軋みながら内側へ開いた。鍵は掛けていなかつたらしい。鍵の存在を知つていて掛けなかつたのか、知らなかつたのか、あるいは 掛ける余裕などなかつたのだろうか……。

「失礼いたします！」

意を決し薄暗い室内へと足を踏み入れる。眠つてゐる可能性を考慮して、焦る心に反して扉は静かに閉めた。

神将ともなれば城内で一番豪奢な部屋を望む事も出来たというのに、寝室が分かれてしまはず、控えの間すらない。部屋をぐるりと見渡すほどの広さもなく、程なく目的の人物がバルコニー側の寝台にもたれ掛かっている様子が目に留まつた。

身動き一つしないその姿にどきりとし、余分な家具一つとしてない部屋を早足でよぎる。

神将への距離が半分を超えた頃、田の前の姿にふと違和感を覚え、足を止めた。

(誰……だ……?)

いや、この部屋にいる以上神将閣下に間違いはない。それに本人だと『感じる』。それでも疑問を覚えてしまつには理由があった。

神将の身を包んでいた神紋持つ穢れ無き長衣は、街区の子供達が着るような丈の短い簡素な服に変わっていた。黒玉のサークレットは額になく、虹色に輝いていた金の髪はくすんだ金色になっている。俯いて陰になつてているため、顔は分からぬ。

再度足を踏み出し、ゆっくりと近づいていく。

ティツカードは『彼』の傍らに跪き、触れようとして一瞬ためらつた後、優しく前髪をかき上げた。髪質は受けた印象よりも存外柔らかく、指の間をするりと流れ落ちる心地よさに、いつまでもこうしていたいとも思われた。

寝顔は穏やかだった。

(なんとも……あどけない……)

同じ顔だとは思うが、目を瞑っているから本人だと断定は出来ない。印象もかなり異なる。戦場にいた神将は大人びて年齢不詳だったが、『彼』はとても幼く見える。

姫は言つていた。『の方は幼くていらっしゃる』と。

(御幾つなのだろうか……見た目通り……?)

だが、益々神将本人だと思つようになつた。

「……閣下」

指先が額に軽く触れた時、ぴくりと瞼が震えた様に見えた。

(瞳が、見たい……)

突如、猛烈に彼の瞳の色を見たいという想いに襲われた。

「閣下……どうか御目覚めください。私に……貴方の瞳を、見せてください……」

反応したのは、どちらだろうか。

額から流れるように落ち、包み込むように頬に触れた手の平の熱か。それとも、耳朶に触れるほど<sup>じだ</sup>の距離で囁かれた、熱い吐息のような言葉にか。

彼の瞼が大きく震え、うつすらと開かれ始めた。

(ああ……新緑の緑だ……)

目覚めたばかりの彼は視線をしばし彷徨わせ、そしてついにティックカードをその視界に捉えた。

「……ティックカード……？」

その瞬間、ティックカードは知らず笑みを浮かべていた。

「……？ あ、れ……？ 何でティッシュカードがオレの家にいるんだ？」

彼は簡単に言つと、寝惚けていたのだ。

自分が城で意識を失つたのだと直ぐには思い出せず、普通に家の自分の部屋で目覚めたと思い込んでいた。そのため己の口でティッシュカードの名を呼んでおきながら、自分の口調にまで気が回らなかつた。

それどころか、呑氣にも、  
(うわ……、こんな間近で人の顔見たの初めてだ……)  
などと思つていた。

「閣下……」

(…………閣下…………？)

とは言え、いつまでも寝惚けている筈がなく、彼も当然覚醒へと導かれた。

「…………え！」

ザッと、冷水を浴びたようになつきつと意識が浮上し、ぎょぎょぎょ  
よろ周囲を見渡した。

「え！ オ、オレの部屋じゃない！？」

慌てて服を叩いたり引っ張つたりして、自分の『私服』を確認している。

「ええ！？ でもこの服…、ビ、ビービービ…！？」

終いには額に手をやり、サークレットが無い事も確認して泣きそ  
うなほど混乱した。

「落ち着いてください、閣下」

その混乱に釣られる」とのない静かな呼びかけが、彼の心の荒波  
を和らげた。

「……ティックカード」

「は」

「オレの外見、どうなってる…？」

「くすんだ金の髪、緑の瞳。大きくて綺麗な目をされていますね」

「よ、余計な感想はいいつて」

予想外の攻撃に、彼は頬をつっすりと染めている。

「服装も込めて一言で申しますと、街にいる普通の子供のようですね」

「……ティックカード」

「は」

「オレが、分かるのか？」

「神将閣下であらせられます」

彼はティックカードの田を真っ直ぐに見つめ、ビービーして分かるのか  
無言のまま問いかけた。

「当然です。私は貴方の副官ですから」

心に切り込んで来るかのような曇りなき藍色の瞳に、何故かうろたえてしまった。

「私は貴方を知りたい。公私ともに貴方の支えとなりたい。そう思っています」

確固たる絆が築かれるほど時間は、まだ共にしていない。だけど。

『オレ』が『僕』だと直ぐに気付いた。

『知りたい』とも言った。

『知りたい』と言われた時、心の内がほんのり暖かくなつた。

「ティッシュカード」

「はい」

名を呼んで、応えてもう。それだけで奥底が温ぬくまつた。ならば、反対に名を呼んで貰つたら？ 想像するだけで、期待に胸がふわふわする。

「リジュ。オレの名は、リジュ・ウイルス、だ」

ティッシュカードは驚いてやや目を見開き、そして嬉しそうに顔を綻ばせた。

「リジュ様」

「『様』はいらない。『オレ』は下区で生まれ育つた、ただの十四のガキなんだからさ」

「……リ、リジュ」

「ああ」

やつぱり、予想通りだ。呼んでも「りつ」と、ウキウキする。

「りつだ、リジューだよ」

数ある呼び名の中で、最も好きな名だ。

『『理の樹』。父神ちちがみが『えてくだせつた、人としての名』

一番多く名乗つてきた、大切な名だ。  
リジューは満面の笑みを浮かべた。

## 絆の芽（後書き）

ようやく更新できました。  
夏は忙しくて…なかなかできません。週一位は更新したいものです。

## 呪いのやうな愛（前書き）

短いですが、わざと重要な話です。

## 呪いのよがな愛

リジュは花畠の中にいた。

地上にある、神の住処。神の降り立つ場所。

リジュの目の前には、幼き無垢なる母親が花に埋もれて眠っている。彼女がなにをしようとも、何処で眠ろうとも、それを妨げる者は存在しない。

「帰るといひを、すまないな」

ぽんやり母を見守るリジュの背後から、声がかけられた。

「お気になさらないでください、一番田。貴方の言動は、いつもだつて僕の事を考えてのことと知っています」

一番田くと振り向いたリジュは、僅かに首を傾げて用向きを尋ねた。

「今日は何がありましたか？」

「……お前の喜ばしい感情が、私の処まで伝わってきた

リジュは緩く微笑した。

「副官が、僕のこの姿を見て、神将だと気づいてくれました。僕を知りたいと言つので、名を教えて呼んで貰いました。とても、嬉し

かつた……

嬉しかつたと言いながら、その目を伏せた表情は寂しさに溢れていた。

「その後、何があつたのだ。先ほど、お前から不安を感じた」

一番目は、優しくリジュの頭を撫でながら問いかけた。

「何も……何もありません……。ただ、僕が勝手に不安になつただけです。怖くなつただけ、です」

「何が怖いのだ？」

「……人間は、神を憎むことも嫌いになることもできない……。僕は、人間としても、神将としても、神としても、いずれの時も神の<sup>くびき</sup>から逃れることはできません。人間は誰も僕を嫌いにならない……。そう、作られています……」

「それが恐ろしいか

「向けられる愛情の、どこまでが本物なのですか！？」

大きな手の平の温もりを頭上に感じながら、吐き出す言葉は止まらなかつた。

人間は無条件でリジュに愛情を抱く。例えリジュに手ひどく扱われたとしても、決してリジュを嫌うことはない。

「僕を支えたいと言つた、僕を知りたいと言つた、彼の感情の何処までが本当で、何処からが強制されたものなのでしょう！？ 全て真実か、全て偽物か、それを判断することはできません！ だから、だから怖い……！」

リジュは一一番目から身を離し、蹲つて激しく地を叩きつけた。そ

の際に乱雑に扱われた花々は花弁を散らし、宙をゆるりふわりと舞い落ちる。

「なんにも美しく幻想的な景色の中、体の震えは止まらなかつた。

」の愛情は呪いに近い。家族の愛、友情、あらゆる人からの愛。その全ての根底に疑いを抱かずにはいられなくなつてしまつ。

一度考えてしまえば、もう一度と頭から離れなくなると、知つていたからこれまで見ない振りをしてきたのだ。

「恐れるほど、それほどに、お前は彼に傍にいてほしこと思つたのだな」

一一番田は腰を落とし、末の弟の体を抱きしめた。

「でも、そんなこと、思つてはいけない……」 だつて、彼の想いは偽物かもしれないのに……。「だが、本物かもしれない」「それは誰にも分からぬ」 「そうだ、分からぬ。ならば、信じるだけだ」 「…………！」

リジュはしばらぐの間、声も出さず兄の胸を濡らし続けた。

「僕は……」「僕は……」

やがて、ぽつと呟く。

「僕はどうして神なんだろ?」  
「五番田……」

リジューは、一番田の手を回した。

回した手で、ぎゅう、と抱きつき、小さな声で囁く。

「僕は、ずっと人間でいたかった……」

## 呪いのよひな愛（後書き）

リジュの神の血が覚醒してから死ぬまで続く苦悩です。しかも、神だから寿命が長い。ほゞ、永遠の苦しみ。  
好意を向けられても、完全に信じることができない。  
そういう苦悩は今後も出でてくると思います。

## 闇夜の中（前書き）

前書きって、いつも何を書いたら悩みます。書かなくてもいいんだと、最近気づいたのですが、今更なくしても変かな…と思つたり。

## 闇夜の中で

光の民の夜は早い。

城内や騎士団、警備隊などは交代制で夜通し警戒態勢を引いているが、月が頭上に昇る頃にはほとんどの民が眠りについていた。

暗闇は闇の神の支配下にあると、一般的に認識されているからである。

建物から漏れる光がほぼなく、月の淡い光に照らされた道をリジューは一番田と共に歩いていた。

祖父が恐らく心配して起きて待つているだろつと思つてはいたが、兄と共にあんな静かな時間が心地よく、ゆつたりとした歩みを変えることはしなかった。

ずつと人間でいたかった。そう泣いたリジューを、一番田は神として無責任だと責めることはなかった。

悩み苦しむ度、一番田は優しく接してくれる。あからさまな慰めの言葉はないが、落ち着くまで頭を撫でてくれたり抱きしめてくれたりする。

一番田がいなくては、リジューはとっくに駄目になっていただろ。人間でいたいという心に反して、耐えきれず、人間でい続けることは出来なくなっていたに違いない。

だが、思い悩む都度、一番田の優しい気配に慰められ、心は落ち置いてまだ頑張ろうとこづ氣になれるのだった。

「もう大丈夫か？」

「はー、ありがとうございます」

黙つて横を歩いていた一一番田が、街区と下区の境付近で言葉を発した。

「ならば、私はそろそろ……」

「？ 一一番田、どうかされましたか？」

ふいに声も歩みも止めた一一番田に、疑問を投げかける。

「……人の気配だ」

「え……？」

離れた暗い路地裏へ流す、一一番田の視線の先を追いかけて見やる。この姿の時の身体能力は人間の物であるため、言われるまで気がつかなかつたが、確かにその路地には人がいるようだ。しかし今までは人相どころか姿形の判別がつかない。

このような時間にあのような場所にいる。これ程怪しい事はない。どんな人物か確かめるべきだらう。

肉体の隅々に意識を拡散させ、力を行き渡らせる。存在変換するほどの力は必要ない。ただ身体能力を僅かに向上させられれば良かつた。

少しづつ視界がクリアになっていき、暗闇に潜む人物の輪郭が鮮明になつていく。一人ではなく一人いるようだ。

「……！」

「どうした、五番田」

一一番田は、肩を揺らがした五番田の動揺を見てとつた。

「……一人は知り合いです。もう一人は……どこのかで見覚えが……」

服装からすると、商人のようだ。じく最近見たようなきがするが……。

もつと近くでならば思い出すだろうか。

路地の手前に、木箱が幾つか壁に沿うように置かれているのを見つけた。

「一番田はどこで待つていてくださいますか」

「構わないが、油断せぬ様に」

「はい」

注意を受けるまでもなく、何があつても対応できるように肉体に力を行き渡らせたままで近づいていく。

わざとらしくならぬよう、注意深く木箱に足を引っ掛けた。

「あつ」

木箱は、大きくはないが、この静かな夜には充分なほどの音を立てた。

「！ 誰だい？」

暗闇にいた人物は、突如現れた人の気配に驚き、誰何した。

「あたた…、あれ…？ もしかして、おっさん？」

「君は…リジュ君……」

「こんばんは」

いつも通りの印象を『える』ように、灰色の髪をした人物へゆるく

微笑んでみせる。

「奇遇だな、こんな所で会うなんてさ」

「リジュ君、こんな時間にどうしたんだい…」

時も時だし、場所も場所だ。完全には警戒を解けないようだ。

「オレは仕事帰り。初田だから慣れてなくつて、こんな時間になつちやつたんだよ」

明るい声で話しかける。

「おっちゃん、どうしたの」

「おい……ハズロ、誰だ？」

「あ、ああ…、下区の子でリジュ君と言つんだ」

「はじめまして」

「ふう…ん。俺あ、行商人のエスターだ。まあ、よろしく…な」

エスターは商人らしいと言えば商人らしい、リジュをぎらついた目で上から下まで探るように見ていた。やはり昔から知り合いであるハズロよりも警戒心が高い。

リジュはそんなエスターを流し目で見つつ、商人にしては警戒心の異様な高さに違和感を感じていた。

「仲良しなんだ？」

「まあね、放浪師も行商人も命の危険度は同じくらいだから、生きて再会できる相手つてのは少なくてね。お互に顧客の要望とか、色々な情報を共有してるんだよ」

「今日は俺の暇あ持て余してゐる貴族の客があ、放浪師の話を直に聞きてえってんで、こいつを連れてつてやつたんさあ」

「相当退屈だつたらしくてね、お陰でこんな時間になつてしまつたんだよね」

「へえ……」

「」の辺りでハズロはリジュの態度に可疑いを覚えたらしい。

「リジュ君、どうかしたのかな？ 何だかいつもと違つ『氣』がするのだけど……？」

「そう？ クス、こんな暗い処で会つたことがないからやつ感じるんじゃない？」

（そろそろ潮時かな？）

リジュは現在、普段とは比べ物にならないほど肉体に力を満たしている。人間の範囲を超えていないとはいえ、精神が全く影響を受けないわけではない。

通常時を意識してはいるが、親しい相手には違和感を覚えさせる可能性があった。

「『めん、じーちゃんが心配してるから、そろそろ帰らなきや』

「あ、ああ、そうだね。すまないね、君はまだ子供なのに引きこめて」

「気にすんなつて！ また話を聞かせてよ。今度は昼間にね！」

「もちろんだよ。まだまだ話していない事は沢山あるから、楽しみにしておいで」

「ありがと！ ……エスターさんも」

暗い鎧色をした行商人の目を見上げ、口元だけで笑いかけた。

「今度、何か珍しいものがあつたら見せてくださいね」

「…………機会があつたらなあ  
「クス……それじゃ」

一人のいた路地裏を追い越し、もう一度振り向いた。

「おやすみなさい」

それは一人への挨拶でもあり、離れた場所で見守っていた兄への挨拶でもあった。

一番目は微かに頷いて、空氣へ溶けるよつに姿を消した。

(明日、確認しないと……)

放浪師、もしくは行商人を招いた貴族が存在しているか、確認しなくてはならない。

親しい人を疑うことは心が痛むが、怪しい者を見て見ぬふりは出来なかつた。

どれ程小さな芽であろうと、危険なものは放置する訳にはいかない。

守ると決めたのだから……。

## 闇夜の中（後書き）

話がなかなか先に進みませんね。  
主人公も人から一歩引いた感じなのが、なかなかなくならないし…。  
もっと頑張ります！

**従姉と幼馴染（前書き）**

久しぶりの投稿になります。

## 従姉と幼馴染

家に帰り着くのが、すっかり遅くなってしまった。

リジューの祖父も一般的な年寄りに倣つて早寝早起きなのだが、リジューの帰宅が遅い日は帰りを起きて待つている。そのくせ、朝は通常通りに起床するのだ。

年寄りだから体の事を考えて、きつちり睡眠を取つてほしいとりジューは思つてゐるが、その原因となるのが自分自身なのだから始末が悪い。

「ただいまー」

「ああ、おかえり」

「…………おかえり」

だが、今日はいつもと違う人物達に出迎えられた。

「え？ 二人とも、どうしたんだ？」

こんな時間にはいないはずの、従姉いとこのノイノと幼馴染のセイが家中で寛いでいた。

いや、ノイノの強張った顔を見る限り、穏やかな時間を過ぎにしてはいなかつたらしい。

「話でもと思つて仕事帰りに寄つたんだが

「そうだつたんだ？ そういうや、じーちゃんは？」

「俺達が代わりに待つてゐるからと寝てもらつた。お年寄りに夜遅

くは、あまり良くないだろ？」「

「そりや、遅くなつてごめんな

「……」

ノイノは顔色をくろくろとして、全く会話に入つてこない。驚くほどいつもと異なる様子に、リジュはセイの耳元に顔を近付け、声を潜めて問いかけた。

「何か、ノイノ変な気がするんだけど」「……まあ、それは、な」

セイは理由を知っているようだが、ノイノが椅子を立ち上がる際に立てた大きな音で、それ以上返答を得ることは出来なかつた。

「…………あたし、帰る」「えつと……ノイノ？」「リジュ。話があるから、ちょっと外まで付き合つてくれない？すぐ終わるしさ」「オレ、だけ？」「そうよ」「…………わかつた」

見るからに不機嫌なノイノと一人きりはご免こうむりたいが、ノイノから発せられる異様な気迫に断る勇氣も出てこない。

重く溜息を吐きたい気持ちで、家を出ていくノイノの後を追つた。ドアを閉じる間際、セイとの視線が絡み合い、『すまない』とその唇が模るのが見て取れた。

「あたし、従弟としてのあなたは好きよ」

外へ出たノイノは僅かな沈黙を経て、言葉を紡いだ。

非常に近しい親戚として、その好意はわざわざ声に出されなくても感じていた。嫌悪感を抱く相手に、朝食を作るなどの世話を焼く事はあるまい。

だが、従弟としてのリジュが好きだと言つた、今日の前にいるノイノからは好意に近い良い感情が全く感じ取れなかつた。

それどころか、射るような鋭い視線は憎しみすら感じさせむ。

(…………憎しみ?)

光の民が負の感情を?

(まさか…………)

光の民でも彼の姫将軍のように可能性を持つ者は存在するだろつ。しかし、親戚として頻繁に顔を合わせていたノイノは、これまで純然たる光の民であつた。

清々しいほどに彼女には一切の曇りも濁りもなかつたのだ。他の人々と違つて、違和感のないそれは彼女自身の生まれ持つ個性だつた。

もしかすると、元々可能性はあつたが、今まで負の感情を持つ理由がノイノには全くなかつただけなのかもしれない。

ノイノは憎しみの籠つた視線をリジュに向けている。では、リジュがノイノに初めて負の感情を抱かせたということなのか。

リジュは生まれて初めて負の感情を向けられるという事態に、現

状を無視してうつかり感動してしまった。

「何か、あたし変なのよ」

自分の内側に入りかけていたリジュは、ノイノの声にハツとして意識を戻した。

「従弟としてのあなたは好きだけど、あいつがあんたを見る時とか、あいつがあんたの話をしてる時は、あなたの事がすっごい嫌いな気がすんの。でも、そんなやな気持ちが出てきたなって思うと、……どう言つたらいいのかな……無理やり消される感じがして……」

「無理矢理……消される……」

「そう！ 消されてるんだ！ あいつが関わったあなたは嫌いなハズなんだ。多分、あたしの中ではそれが正しいはずなのに、いつでもあんたが好きだって、直されてるみたいな」

それが、神に対する修正だ。

リジュは頭の片隅で、冷静に咳く自分を自覚していた。

「ノイノ、あいつって誰？」

「言わなくたって、わかるでしょ？ あんたを大切にしてる、あいつよ。いつだって、あんたの事ばっかり……！」

「あいつが、好き？」

「好きよ、好きなのよ、なのにあいつはあんたしか見てない！ あんたの事ばっか考えてる！ あいつはあんたのこと」

「ノイノ」

ノイノの言葉を強制的に終わらせた。

彼女の言葉はいくら続けても、彼女自身を傷つけるだけ。

『あいつって誰？』

卑怯だなと、思つ。

わざわざ言わせなくとも、誰の事を言つているかなど理解していただろうに。

誰のことかを明示してもらえれば、『あいつ』と距離を置く理由になるかと思ったのだ。

それは微塵もノイノの為にではない。嘘をつき続ける自分が楽になるかと、卑怯な想いに駆られた。

「ノイノ、あいつの想いは幻のようなものだ。ノイノがオレを嫌いになれないのと同じように」

ノイノに対する罪滅ぼしのように、彼女を樂にする言葉を吐く。

「本心ではないのに、あたかもその心が眞実であるかの如く作り上げられた、偽物の想いなんだよ……」

それが本物か偽物か。

判別する手段はリジュ本人すら持つていない。

ノイノの為にしてやれる事は、ただ距離を取ることだけだ。

「リイ、その…大丈夫だったか？」

「別に何も問題はないよ」

家に戻ったリジューは『作った』笑顔をセイへ向ける。付き合いが長いだけに、ただそれだけで意図的に間に壁を置いたことが理解できたようだ。セイの体が緊張している。

「しばらく忙しいから、会えなくなる」

「……朝早くや、夜遅くは違うだ」

「会えないよ。……朝も、昼も、夜も。大切な話があつたなら、今聞くけど」

「いや……特に、重要な話では、ないが……」

「やつ? なら、今日は遅いし、もういいかな」

ノイノに言ひておきながら、本当にどうなのだろうかと疑問に思つ。追つ詰められた獣のような激しさを、無理に隠したこの瞳や、突き放されるのを認めたがらない震えた声、逃がしたくなこと云うが如く、手首を掴んでいるこの手の力強さ。

「…………リジュー？」

「オレはもう、会わない」

最後通告にあるつと手放し、見たことのないほど青ざめた顔。

「……ノイノに優しくしてやつてくれ」

「…………」

作りられた感情ならば、そつと時を待たず、セイの痛みは癒されるだろう。

そうすればいすれ、その心がノイノへ向へることもあるだろ？……。

従姉と幼馴染（後書き）

今まで直接でてこなかつた従姉が今回出張つてます。  
まあ、いつかへの伏線だと思つて我慢してください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3086m/>

---

理の樹(コトワリノキ)

2010年10月14日18時56分発行